

に於て先づ哲學的であり藝術的であり更に又道德宗教的であるといふこと——これが先づ注意さるべき事實である。古來の理想主義的傾向が必ず先づ藝術的に哲學的に且道德宗教的に現れた事實をば、私はこゝに一々例證する餘地を有たない。藝術と哲學と宗教とが互に混合融會してさながら一全體であるが如き觀を呈したが最も純粹な理想主義的傾向が示した事實であつた。殊に我國最近の傾向に於ては、一種哲學的な又はメタフィジカルな傾向と、一種センチメンタルな宗教的興味とは互に聯關して一層複雑な傾向を成しつゝあるやうに觀へる。先づ藝術的に始まり、哲學的に發達して、必ず終に道德宗教的に進まなければ已まないが、すべての理想主義的傾向に普通な現象である。

されば新理想派哲學の追求を初めとして、最近の宗教的興味に至るまで、すべて尙幼稚未熟な現象であつて、到底嚴格且純粹な意味に於ての理想主義的傾向ではないとしても、そも／＼斯くの如き聯關した諸現象が、如何ばかり單純幼稚であるにせよ、引きつゞいて此處彼處に起つてきたといふ事は、一般思想界の進歩に取つ

て決して全く無意味なことではなく、寧ろ何等か重大な意味を暗示するものと判斷されなければならぬ。即ち現實の事象そのものは微弱を極めたものであつても、それが與へる暗示の意義に至つては頗る重大深刻であると言はなければならぬ。斯かる重大な意義とは外でもない、人心はひとへに又いつまでも同一な實證主義的思想にのみ満足することが出來ず、何等か理想主義的な思想や信仰に頼りどころを求めんとするに至つたといふことは是れである。勿論今日の文化主義の追求や宗教的興味やは、こと／＼斯かる純粹な要求から産まれたものとは見られず、寧ろ好奇心や不純の態度やに基づいたものが多いとしても、中には在來の現實主義的な實際主義的な又は實證主義的な態度や精神に満足することが出來ず、如何にかしてそれ以上に一層高い人生の立脚地を求めんとした者が全く皆無であり又あつたとも考へられない。多數の不純な態度の中にも少數者の純な美しい要求が混つてゐたことは決して拒まれない。即ち引きつゞいて種々な理想主義的要求が起つたといふ事は、假令それが如何ほど單純幼稚なものであつても、少なくとも人心が現實主義乃至實



證主義以外に何等かの意味に於て理想主義的根據を得んと欲してゐることを示すもので、そこに吾々はおのづから人心の變化を認めることが出来るのである。私はこゝで實證主義はわるいとか、實際主義は淺薄であるとか、假りそめにもそんな意味のことを言はうとするのではない。現實主義や實證主義やが如何ばかり大なる真理と生命とを備へたものであつても——事實またそれを備へてゐるのであるが——人心はひとへに斯かる同一の態度や精神にのみ満足することが出来ず、何等かの意味に於て理想主義的態度を求めると至るといふことは、今日までの歴史が示した必然又必至な運命であると言はなければならぬ。そこに吾々は人心の最も微妙な變化を認めるのである。

曾て一時文化主義が盛に唱へられた時、世間の多數者からそれは空想である、又はブルジョア式思想であるとして可なり激烈に反對された。そして文化主義や新理想派哲學の追求やは、單に在來の實際的な改造思潮——主として實際的な經濟思潮に對抗して現はれたものであるといふやうに解釋された。勿論實際的な經濟思潮を

ば單に實證主義の一面を代表するものと觀れば、斯かる解釋も全く誤つたものではないが、然しながら理想派哲學の追求や宗教的興味の昂上やは、決して單に實際的な經濟思潮にのみ對抗して現はれたものでなく、寧ろ一層根本的に今日までの實證主義的精神に對抗して、又は此の精神以上に進まんとして現はれたものであると解釋されなければならぬ。斯く解釋してのみ吾々は初めて最近のさまざまな理想主義的風潮に一種の深い意義を見出すことが出来るのである。此の點に於て吾々は必然的にドイツ思想界の變遷をも聯想せざるを得ない。此の國の思想界が我が國のそれよりも一層複雑混沌を極めてゐるに拘らず、世紀末から今日へかけて、最も進歩した思想界は、十九世紀の實證主義から解脱して、又は此の實證主義の土臺の上に、更に新らしい理想主義を建設せんと努力しつゝあることは、殆ど疑ふべからざる事實である。少くとも此の國の思想界が單純な實證主義に満足することが出来ず、寧ろ反撥的に理想主義に向かつて突進しつゝあることは最も明白な事實である。我國最近の思想界——殊にさまざまな理想主義的風潮は、畢竟ドイツの思想界を模倣した



もので、彼の地の思想界が混純を極めてゐるさまは、おのづから我思想界のそれにも酷似してゐると判断する人も有る。成程斯やうな模倣的傾向も今日多少認められないではないが、然しながら私は今日の此の傾向を單純に外國の模倣とばかりは解釋したくない。假令そこに濃厚な模倣的傾向が認められても、さまざまの意味で理想主義思潮を追求せんとする要求が多少でも存在しないかぎり、たゞ偶然的に模倣といふ事が起こつてくる筈はない。故にドイツのそれが實證主義から理想主義への推移であるやうに、我國の思想界も、假令比較的狭い範圍内に於てにせよ、實證主義と對立して、人心が漸く理想主義的精神に就かんとする傾向を備へるに至つたと解釋されなければならぬ。私はこゝに深く考へなければならぬ問題があると信ずる。

## 第二

ウキリアム・ジエームスが曾て經驗派と唯理派とを對照して、一方を硬派の人他

方を軟派の人と呼んだは廣く知られた事實である。ジエームスの解釋によれば、經驗派と唯理派との本來の區別は、決して單純に學理上又は理論上の區別ではなく、實は一層深く人心の互に異なる二の傾向に基づくものに外ならないといふ。所謂テングダー、マインドの軟派の人は、概して理想主義的に又は唯理論的に傾く者であるに反して、所謂タフ、マインドの硬派の人は、概して感覺主義的に又は經驗主義的に傾く者であるといふ。理想主義的の外更に宗教的に樂天的に一元論的に且獨斷的に傾くが軟派の人の自然であるに對して、硬派の人は多く非宗教的に懷疑的に多元的に又は唯物主義的にさへも進まんとする傾向を備へてゐると。ジエームスの考察は、主として唯理主義と經驗主義とを對照して、孰れかといへば經驗主義の方面に多くの眞理を見出ださうとした態度であつて、私がこゝで對照しようとする理想主義と實證主義との區別とは多少考察點を異にしてゐる。ジエームスの見地は著しく認識論的であり、私がこゝで取つてゐる見地は一層廣く哲學的であり人生觀的であり思想的である。斯やうな多少の區別が有るに拘らず、ジエームスの解釋はおのづから



理想主義的思想と實證主義的思想の上にも應用される。即ち此の區別は、普通に想像されるやうに、單に學理上又は純理上の區別のみではなく、實は一層深く人心の自然の傾向に胚胎するもの——人心の互に異なる二の傾向に胚胎するものであることに注意されなければならない。人心の自然の傾向に胚胎するものであるから、實證的態度も理想的態度も共に活きた現實の生活そのものであつて、決して單純な空理や學說のみではない。同時に又此の二の態度は共に人心の互に異なる傾向に根ざしてゐるのであるから、二の態度の間に起る軋轢爭鬪は容易に調和されるものではない。理想主義と實證主義との調和は極めて稀にしか實現されないもので、寧ろ兩主義の不調和は人間思想の永遠の實相であるかも知れない。私はこゝで兩主義爭鬪の蹟を觀察したり、又は兩主義の價値の優劣等を比較しようとは思はない。寧ろ此の二の態度は共に人心の自然的傾向に基づくものであるから、二ながら共に活きた現實の生活そのものであつて、決して一方のために他方が犠牲に供せらるべきでなく、出來得べくば二の傾向は互に相調和して一全體を成すべきであるといふが、特に私

がこゝに主張せんとする要點である。然かも最近十數年間我思想界は實證主義全盛の時代であつて、實證主義の長所と精神とは、假令完全でないまでも、或程度まで多數者によつて認められたに反して、理想主義の根本精神に至つては、今日尙世間に認められず、却つて屢々多數者から誤解されてゐる觀が有る。故に私はこゝで主として理想主義的思想の特徵を叙述し、此の方面の思想が實證主義の思想と共に人類生活に取つて極めて深い意義を有つてゐる所以を明らかにしたい。勿論理想主義の特徵を明らかにすると云つても、私は普通哲學上で取扱はれてゐるやうな様式から離れて、端的に實際生活上から觀た特徴を明らかにしたいと思ふ。

勿論一概に理想主義と言つても、それが具體的な活きた生活であるかぎり、それ種々な特徴を備へて、必しも一律一體に概括されるべきものでない。例へばフランスの理想主義とドイツの理想主義とは必しも同じでなく、又それ等は明らかにイギリスの理想主義とも違つてゐる。然かも各種の理想主義を總括して考へるとき、そして其等がいづれも必然的に人心の或普遍的傾向から發生するものであることを



考へるとき、吾々はそこにすべての理想主義に共通な根本特質を發見せざるを得ない。斯かる根本特質が何であるかを明らかにするは勿論哲學の職務であるが、暫らく斯かる組織的研究から離れて、單に實際生活上から觀た特徴のみを順序もなく組織もなく斷片的に列擧すれば、私は先づ第一に其の主觀的特徴を數へざるを得ない。元來實證主義的思想が客觀的特徴を備へてゐるに對して、理想主義的思想が主觀的特徴を備へてゐることは、今日まで普通に指摘された事實であるが、理想主義と實證主義の區別は主として此の點に存し、又理想主義の根本特徴も大かた此の點に存するのであるから、私はこれまで普通に考へられたとは違つた別方面から此の根本特徴を一層特殊なさまに考へて見たいと思ふ。ジェームスは經驗主義的な實證主義的な傾向の人をば「硬いこゝろ」の人と言つたが、私は別に「確實を尊ぶこゝろ」の人々、又は「精確な事實を尊ぶこゝろ」の人々と解釋したい。確實とか直接とか現實とかは實證主義的傾向の核心であつて、此の確實を尊ぶこゝろは即ち實證主義の本體であるとも云へる。斯やうな確實とか直接とか現實とかの反對は、例

へば空想とか感情とか非現實とかいふたぐひのもので、實證主義に取つては、非現實とか空想とかいふたぐひのものほど惡むべく斥けらるべきものはない。最も直接的な現實的な明確な事實でなければ、實證主義的な人はどうしても満足することが出来ないのである。斯かる現實的事實を尊ぶこゝろは即ち近代の自然科学的傾向であつて、自然科学と實證主義とは到底不可分な最も親密な關係を有つてゐる。蓋し實證主義的な人々に取つては、客觀界即ち自然界の事實と眼前直接な實際生活とは最も確實にして且直接な事實であると感じられ、客觀界を精確に理解し掌握することゝ、實際生活を確實に完全に整理し組織することゝは、即ち人生に於ける最大事實、否人生そのものであるとさへも感ぜられるのである。同じ事を一層哲學的に言へば、實證主義的傾向の人々に取つては、眼前直接の實際生活が一切の根本であつて、此の實際生活を完全に整理し組織するためには、先づ自然界の客觀的事實を出来るだけ精確に綿密に理解しなければならぬと考へられる。コムトによつて代表されたヨーロッパの實證主義は、明らかに斯やうな徑路を取つて進んだものと解釋さ



れる。實生活改善、自然科學、社會主義、經濟生活——これ等はすべて一貫した概念であつて、一として孤立して存立し得るものは無い。廣く眼を開いて出来るだけ確實に精確に客觀的事實を掴まうとするが、どこまでも實證主義的な人々の態度である。ジエームスは主智的傾向は「軟いこゝろ」の常態であると説いたが、私は寧ろ反對に明確を尊ぶ理智的態度はどこまでも實證主義の本來であると見たい。感情や想像や空想やは、實證主義に取つては、單に手段としての價値を備へてゐるだけで、多くの場合に於ては其等は寧ろ「明確」を妨げる邪魔物であり妨害物であるやうに考へられる。そして一たび近代自然科學の洗禮を受けた現代人に取つては、此の事實の尊重といふ主智的態度は、殆ど滿身の肉と成り血と成りおぼせて、現代人は此の意味に於て總て主智的であり又實證主義的であるとも言へる。如何なる意味に於てか理性の批准を経ない思想や感情や信仰やは、すべて誤れる空想として排除されるのである。實證主義の透徹的精神はひとへに此の點に存する。

然るに理想主義的態度に至つては、全くこれと違つてゐる。實證主義の客觀的態

度と比較して、理想主義が最も嚴格な意味に於ける主觀的態度であるは言ふまでもない。此の點に於てもジエームスは理想主義的傾向を「軟かなこゝろ」と説明したが、私は別に「内面的な深さを欲するこゝろ」と解釋したい。理想主義的傾向を簡單な言葉に概括することは固より困難であつて、「深さを欲するこゝろ」では甚しく物足りないやうに感ぜられるが、私はこれに特別な意味を含ませて、假に斯やうな言葉を用ひて理想主義的な人々の自然の傾向を考へて見たい。極めておほまかに言へば、「實證主義の人々がエキステンシブであるに對して、理想主義の人々は主としてインテンシブであると言へる。理想主義の傾向に取つては、客觀的事象を精確に見分けることが興味の中心ではなく、それは寧ろ主觀的な内面的力の強さや深さや充實さやを經驗せんと欲するところに在る。最も顯著な意味に於て主觀的又は内面的な傾向が先づ理想主義的態度の根柢であることは到底争はれない。内面的な深さや強さやを味はふ心とは、單に瞑想的にロマンチックな思想や感情に耽るといふ意味でなく、寧ろ内面から主觀から外面や客觀に向かつてはたらく力を尊重する心を意味する。」



實證主義の態度の人が自然又は外界から主観へ受ける外來的印象を尊重するに反して、理想主義の態度の人は内から外へ向かつてはたらく力——即ち一種セントリフユーガルな力の現はれを尊重する傾向を有つてゐる。一層簡単に言へば、インテンシブな精神力の發揚發揮が理想主義の態度の人に自然な傾向で、内面性を備へた力の發現こそは人生に於て最も尊いものに感ぜられるのである。インテンシブ、クリエーション——これが理想主義の根柢であることは、哲學の方面に於ては何人にも知られた事實である。理想主義の態度の人が何故客觀的又は外部からの印象でなく、主として主観又は内面からの力の現はれに重きを置くかは、到底理論的には説明すべからざる問題であつて、それは實に此のタイプの人に自然な而して固有な傾向であるとししか考へられない。内面性を缺いた事實とか現象とかは、理想主義の態度の人には、何等のジエニユインさも微妙さも備へない雜多混雜なものに感ぜられ、内面性を備へた力の現はれのみが、ひとへに微妙にジエニユインに尊く感ぜられるのである。故に現實主義のタイプの人が主として客觀的事實を重んずるに對して、理想

主義のタイプの人主として充實した主観の力と深さとを愛する自然の傾向を備へてゐるのである。理想主義的傾向の人は、實證主義的傾向の人と全く方向を異にしてゐることが注意されなければならぬ。内面的な深さを欲するとは、充實した内面生活の奥義を味はんとするこゝろで、精神生活の根柢に於て體驗される深い興味にあこがれる傾向に外ならない。能ふかぎり深く、能ふかぎり充實した、そして能ふかぎり微妙な内面生活を味はんとする傾向が、すべての理想主義的な人々に共通な根本精神で、此等の人々は斯やうな充實した内面生活に於てのみ最も高い人生の奥義を見出だすのである。彼等は必しも明確な智識や確實な智見やを求めないわけではないが、明確な智識以上に彼等は寧ろ深い情熱的な意力や宗教的な無限味を求めんとするのである。情熱的な意力や宗教的な無限味やは、或は屢々明確な智見と衝突し、或は其等の智見以上に存立するものであるから、理想主義者に取つては、明確な智見よりは寧ろ深奥な生活が遙に高い價値を有つものと感ぜられる。普通の智識を以て律すべからざる奥妙深秘な生活が人生の極意と感ぜられるから、



主智主義よりは寧ろ直覺主義乃至神秘主義が理想的態度の極意であると解釋される。主觀主義は大抵ミスチズムに到達するもので、ミスチズムは即ち理想主義の常道であるとも觀察される。即ち實證主義の世界は、それが明確な智識に照らされてゐるだけ、常に明るく透明であるに反して、理想主義の世界は、深秘奥妙であるだけ、それだけ無限味を帯びてミスチックな特徴を有つてゐる。ノフアリスが使つたマジックといふ言葉は、多少極端ではあるが、巧に此の神秘界の特徴を言ひ現はしてゐる。

### 第三

理想主義的態度と實證主義的態度との對照は、單に主觀主義と客觀主義——人格主義と實際主義との對照のみに留まらない。此の根本的對照の外に、更に他の二三重要な相違又は對照が存する。私は試に向一二重要な對照をこゝに列擧して見たい。古來純粹な理想主義的思想が發達した事蹟に就いて觀察すると、そこには必ず次

のやうな特殊な事實が有つた。即ち哲學と藝術と宗教とは、それ／＼フレッシュな活氣に満ち元氣に満ちて、他の時代（非理想主義の時代）に於けるよりはそれ／＼特殊な發達を遂げ、然かも此等の三者が各々孤立した状態に於て存せず、寧ろ互に相關して一全體を成したといふことは是れである。例へば近代ヨーロッパのアイディアリズム全盛時代の如きがそれで、此の時代に於ては、藝術と哲學と宗教とは各々異常な活氣を呈し、然かも三者殆ど同一體であるが如き觀を呈した。アイディアリズムは同時に藝術でもあり哲學でもあり又宗教でもあつたのである。理想主義的傾向に於ては、何故藝術哲學並びに宗教が異常な活氣を呈するに至るか、細かに其の順序を示すことは困難であるが、先づ實證主義的態度から考察すれば、多少其の間の事情を明らかにすることが出来る。實證主義的態度の人々に取つて、そも／＼藝術や宗教が如何なる意味乃至價值を有つてゐるか頗る不明瞭であるが、少なくとも實際生活を眼目とする人々に取つて、藝術と宗教とは、それ／＼みからに絶對の價值を備へたものでなく、何等かの意味に於て實際生活に貢獻する程度に於てのみ相等な價值



を備へたものであるは明白である。事實極端に實際的な人にとつては、藝術とか宗教とかは如何なる意味を備へたものであるか、甚しく不明瞭であり不得要領であるを免れない。實際生活から見れば、藝術は畢竟贅澤品であつて、それみづからに絶對の價値を備へてゐるものとは如何にしても考へられない。況や宗教に至つては、單に實生活を助成するかぎりに於てのみ必要なもので、其の他の點から觀れば何等の價値も無いものと考へられる。されば多數の實證主義者にとつては、宗教は單に末開時代の遺物であつて、科學的智識が進歩した今日に於ては、最早無用の長物たるのみならず、却つて迷信や無智やを傳播する有害な媒介者に外ならない。若し宗教に相等な價値があるとすれば、それは専ら幼稚な無智な社會にのみ取つてのことである、科學的に進歩したものに取つては遂に何等の價値も無いと考へられる。これが普通の實證主義者の態度である。

然るに理想主義者の態度に至つては、これと全く違つてゐる。藝術や哲學や宗教やが何故彼等にとつて尊い價値を備へたものであるかは、おほよそ確實に想像す

ることが出来る。彼等にとつての第一義的生活は、どこまでもインテンシブな内面生活であるから、さやうな内面生活こそは彼等にとつてそれみづからに價値を備へた絶對の生活に外ならない。然るに藝術とか哲學とかは、斯やうな内面生活に對して如何なる關係を有つてゐるかといふと、其等は直に此の内面生活を客觀的に現はしたもので、一層端的に言へば直に尊い内面生活そのものであるとも感ぜられる。就中藝術は或は深く或は高く或は強く感ぜられる内面生活そのものである。隨つて藝術は何等か他のものゝ手段となり、若くは他のために手段としての價値を備へてゐるのでなく、それみづから絶對の價値を備へてゐる尊い内面生活に外ならない。故に藝術は純粹の理想主義が發達した時代に於てのみ眞の純な發達を遂げ、然らざる場合に於ては、到底眞の發達を遂げることが出来ない。藝術の眞の尊重はひとへに理想主義の事であるとも斷言される。更にまた哲學に關してもほゞ同じことが言へる。實證主義的態度にとつても、哲學は實生活組織の要具として高い價値を備へてゐるに相違ないが、然かも哲學が哲學として其のまゝ高く尊い價値あるものと



尊崇されるは、主として理想主義的態度によつてであると言はなければならぬ。何となれば、哲學は他の自然科学と異なり、藝術と同じく尊い内面生活を客観化したものであるから、内面生活が絶対の價値を有つてゐると同じく、哲學もまたそれみづからに絶対的價値を有つてゐるものと考へられる。故に藝術と同じく哲學も主として純な理想主義時代に於て最も深く尊重され且また最も眞實な發達を遂げることが出来るのである。

若しそれ理想主義と宗教との關係に至つては極めて密接であつて、いづれか一方から引離しては到底他方は考へられないほどである。殊に宗教に關しては、理想主義の態度と實證主義の態度と彼れ此れ全く違つてゐる。多數の實證主義者が宗教に對して冷淡であるほどそれほど多數の理想主義者に取つては、宗教は最も親密なものであり且また最も直接な生活である。

理想主義的精神は必ず宗教によつてのみ眞の發達を遂げるのである。故に宗教は單に野蠻時代の遺物のみといふは、主として極端な實證主義者の主張であつて、理

想主義者から觀れば、そはどこまでも永遠に發達すべき活きた生命に外ならない。理想主義的態度と宗教とが何故それほどまで密接であるかは茲で論説さるべきかぎりでないが、理想主義が尊重する内面生活を徹底的にすゝめて行けば、それは必ず宗教的境地に到達すべきは明白である。蓋し極めて簡結に言へば、宗教とは眞に内面生活を内面生活たらしめる絶対の根據に外ならないから、宗教なしには眞の内面生活は不可能なのである。一層精しく言へば、道德生活を眞に道德生活たらしめる根據、藝術生活を眞に藝術生活たらしめる根據、哲學生生活を眞に哲學生生活たらしめる根據は即ち宗教に外ならないから、道德藝術哲學等の内面生活を眞實に完成するためには、人間は必ず宗教的境地に進まなければならぬ。宗教的境地にまで進まずして道德生活や藝術生活を完成せんとするは、肝腎の根據根本を固めずして徒に枝葉の末に走ることに外ならない。随つてまた有らゆる意味に於て宗教を否定することは、結局徹底的な内面生活を否定する所以で、内面生活の完成を否定せずしては、宗教のみを否定することは出来ないのである。これが今日尙一般の理想主



義者が維持してゐる思想で、例へばヨーロッパあたりでも、表面は傳統的宗教に對する熱度が低下したに拘らず、尙理想主義的傾向の人々に取つては、新らしい宗教に對する渴望がますます深まりつゝある所以である。

斯やうに理想主義に取つては、哲學藝術及び道德宗教は、それみづからに絶對の價値を備へた活ける人間生活であつて、三者はいづれも尊い内面本位の生活であると觀られる。故に此等の三者は、實證主義的精神よりは、寧ろ理想主義的精神に一層直接なものであることが知れる。随つてまた永遠の文化の發達を目標とする所謂文化主義は理想主義の主張であつて、實證主義から觀れば、それは可なり空想的な誇張的な主張とも考へられるであらう。蓋し文化主義は哲學藝術及び道德宗教の發達そのものに絶對の價値を與へて、決して此れを他の目的のための手段とすることを許さない。藝術の發達又は宗教の發達そのものが、理想主義に取つては無上に尊い價値を備へたものであると考へられる。故に理想主義は即ち文化主義に外ならぬのである。

さて私は見地を換へて、更に第三の對照として、理想主義が實證主義から異なる別種の特徴をこゝに記して置きたい。こゝに第三の特徴として數へられるものは、實は哲學上の難問題であつて、論旨が餘り抽象的に専門的に傾くから、こゝでは到底其の詳細をつくしがたい。然かも理想主義と實證主義とは、觀かたによつては主として此の點から區別されるのであるから、詳細な哲學的論述に涉ることは避けて、少なくとも此の特徴の要點だけはこゝに記されなければならぬ。吾々はこれによつて、いよ／＼明らかに實證主義的精神と理想主義的精神とを區別することが出来るのである。

斯やうな根本區別とは何かと言へば、實證主義は嚴格に相對主義の立脚地に立ち、これに反して理想主義は何等かの意味に於て絶對主義の立脚地に立つといふことは是れである。私はこゝで根本區別に關する哲學上の論說にまで進みたくなぬ。極めておぼまかに言ふと、例へば實證主義に取つては決して絶對の眞理とか知識とか事物の標準尺度といふやうなものはない。萬世不易の絶對的な道德的眞理又は標準とか、



又は永久不變の絶對的認識といふ如きは、實證主義に取つては寧ろ奇怪千萬な空想であつて、人間の立脚地からは斯やうな絶對的眞理は到底到達すべからざる空想に過ぎないと觀られる。蓋し人間の知識は盡く經驗からの産物であるから、人間のすべての認識も眞理も物の標準も、盡く蓋然的なプロバビリチーを備へたゞけのものであつて、決して永久的又は不變的又は絶對的であることが出來ない。すべて絶對的といふことは、人間に取つては到底到達すべからざる空想であつて、此の空想の上に立てられた知識はまた同じくすべてモンストラスな空想たるを免れないと。これが實證主義の精神である。

然るに理想主義の立脚地を觀ると、其の根柢には必ず何等かの意味に於ける絶對主義が含まれてゐる。人間の智識や物の尺度やは大部分相對的であるとしても、其の根柢には必ず何等かの意味に於ける絶對的確信が含まれてゐる。絶對的信仰が何であるかは、理想派の哲學に於てもそれ／＼違つた解釋が取られてゐる。例へばカントみづからも、「事物を認識するとはアプリアリにそれを認識することである」と

斷じて、先づ論理的認識にも特殊な絶對性を許し、更に道德生活に於ても、最も顯著に絶對的な「無上命令」を認めたとである。故にカントに取つては、絶對的な認識でなければ眞の認識ではなく、認識といへば、既に其の根柢には絶對性が含まれるのである。新カント派のキンデルバンドやリツカートは、此のカント精神を復活して、絶對主義の根柢に立つにあらざれば、すべての認識生活も結局不可能不成立に終らざるを得ないと言つてゐる。所謂普遍的妥當性を備へたゾルレンやノルムや規範やは、此の派の人々が認めた絶對性そのものに外ならない。此等理想派の哲學論は暫く別問題として、人間生活に於ては、其の根柢に於て、何等かの意味の絶對性的尺度が確信されるにあらざれば、すべて事物の測定は不可能であるといふ主張は、十分深く考察されなければならぬ問題である。或意味から言へば、吾々は今日まで餘り多く相對主義に慣れ過ぎてゐる。純粹相對主義の立脚地に立つて、果たして人間の生活が可能であるかは、今日までは餘り深く考へられなかつた問題である。「人智は純粹に相對的たるべし」といふ實證主義の主張そのものが、既に一種の絶對



412  
的斷案の本質を含んでゐるものではないか。若し此の斷案が絶對的でないとすれば、人智は相對的であるといふことも亦絶對的に不確實であるを免れない。「絶對的標準なしには、真理のあらゆる觀測は不可能である」といふ聖アウグスチヌス以來の宗教的確信は、同時に有らゆる理想主義的思想の根本的確信であつたと批判される。故に理想主義の立脚地から觀れば、實證主義の相對主義といふことは甚だしく不安なあやふやなものに感ぜられる。何となれば、相對主義といふことは、若しそれが其の根抵に如何なる意味に於ても絶對性を含まないとすれば、名目こそは美しく確實らしいが、結局は懷疑主義に陥るものではあるまいか。彼の真理も此の標準もことごとく相對的な比較的なものであるとすれば、世に確實な真理や標準と名づけらるべきものは一として存在する理由もなく、彼れも此れもことごとく其の時其の場所のものといふことに終つてしまふではないか。絶對的な尺度が無いのであるから、絶對的確實とか真理とか標準とかいふものが有り得る筈が無い。すなはち斯くの如きは、名目こそ相對主義であるが、結局は懷疑主義の立脚地に立つもので、相對主義はす

なはち懷疑主義であるといふ結論を免れない。論より證據吾々は此の事實をば現に活きた歴史の上に見てゐるではないか。十九世紀末はヨーロッパに於ては一種の懷疑時代であつた。世紀末の此の懷疑的傾向は、勿論種々複雑な他の原因に基づいたことも疑はれないが、此の時代は恰も實證主義全盛の時代であつたことを忘れてはならぬ。他の目に見える陽はな原因はさぼども思はれないが、相對主義から結果する一種微妙な懷疑的傾向は、人心を其の根抵から萎靡し腐蝕させたものではあるまいか。殷鑑遠からず、現に今日純粹相對主義の立脚地に立つてゐる者は、いつまでたつてもふら／＼した懷疑的傾向に苦しまなければならぬではないか。實證主義の立脚地に立つかぎり、吾々はいつまでたつても懷疑的傾向から遁れることが出來ないではないかと。これが理想主義の主張であり又其の根本精神の一である。

#### 第四

私は前段に於て、主として理想主義的精神の特徴に就いて、餘り多く語つたかも



知れない。或は可なり面倒な哲學上の問題にさへも涉つて、専門的に涉つた事を餘り多く語つたかも知れない。私はこゝで妄に實證主義的傾向に反對して、たゞひとへに理想主義的精神にのみ就くべしと主張する者でない。實證主義に關しても、私は十分深い同情と尊敬とを有つてゐる。たゞ然しながら今日までの我思想界の狀況から言へば、主として實證主義的空氣だけが濃密であつて、理想主義的傾向は殆ど全く閑却された觀が有つた。實證主義的態度が唯一の哲學的態度であつて、理想主義的態度は最早過去の遺物のやうにさへも考へられた。現代人の思想は餘りに實證主義化され實際化され科學化されて、殆ど全く理想主義を無視し放擲し過ぎた觀が甚しかつた。然しながら一層高い立脚地から觀れば、實證主義には實證主義の本領が有り、理想主義には理想主義の本領が備はつてゐることは疑はれない。それにも拘らず最近十數年間、主として實證主義の本領だけが認められて、理想主義の本領に至つては殆ど全く没却されたかの觀が有つた。故に私が主として理想主義の精神に就いて語ることは、實證主義に對抗してといふよりは、寧ろ今日まで甚しく閑却された理想

主義の本領を明らかにせんが爲めに外ならない。

若し理想主義的傾向と實證主義的傾向とは、人心の互に異なる二の自然的傾向に胚胎するものであるとすれば、隨つてまた理想主義には理想主義の本領が有り、實證主義には實證主義の本領が有るとすれば、吾々は更に一步進んで此の二大傾向のそれ々の長短を明らかにし、更に出來得べくば此の二の傾向の大體の比較をも試みなければならぬ。換言すれば、實證主義と理想主義とをば、彼れ此れ互に引離して別々に其の特徴を考察するだけに留めず、更に進んで一層高い見地から統一的に此の二の傾向を觀察しなければならぬ。即ち私は前段に於て主として分析的な立場から此の二大傾向を觀察したから、以下専ら総合的な立場から主として兩者の長短を明らかにし且出來るだけの範圍に於て兩者の簡単な比較を試みたいと思ふ。

實證主義は實證主義としての本領を備へ、そして理想主義もまた理想主義としてその本領を備へてゐることは、前段概論した兩主義の對照によつてほゞ明白である。主觀本位的であり、文化主義的であり、且絶對主義的な立脚地に立つてゐる理想



主義は、其の種類と形式とに於ては如何ほど多數であつても、これを概括して言へば、要するに内面生活本位であつて、其の思想的な藝術的な哲學的な又は内面道徳的な宗教的な文化生活は、どこまでも理想主義の眼目である。道徳生活も理想主義の重要な又は根本的な目的であつて、道徳生活の主張なしに理想主義は考へがたい。前段に於て主として哲學藝術宗教を擧げて道徳を數へなかつたは、道徳が理想主義に取つての最高價值であることは勿論であるからである。たゞ理想主義はどこまでも内面生活本位であるから、内面性を無視して、單に外面の結果のみを考へる實際主義とは、おのづから別種の道徳觀を有つてゐる。理想主義の道徳的態度や道徳觀は、實際主義又は實行主義の態度や道徳觀とは甚しく色彩を異にし精神を異にしてゐる。純粹の實行主義に取つては、客觀的な結果が道徳の眼目と考へられるに反して、純粹の理想主義に取つては、客觀的な結果や外的影響よりも、内面生活に於ける動機の純不純や意志の力や又それが他の主觀生活に及ぼす影響等が道徳の眼目と考へられる。故に實行的な道徳生活に於ても、理想主義の本位とするところは飽

まで内面的な生活であつて、内面本位主義はどこまでも理想主義の本領であると判断される。

斯やうな主觀本位の内面主義に比較すれば、實證主義の本領は主として實行主義又は實際主義であることが明白である。尤も實證主義とか經驗主義とかいふ言葉は、主として認識論方面から用ひられた言葉であるが、經驗論や實證論は畢竟如何なる目的に向かつて進められるかといへば、それは窮極實際生活の整理と完成とを眼目とする實際主義又は實行主義であると言はなければならぬ、實證主義又は實行主義は、其の本來の精神に於て理想主義とは甚しくかけ離れてゐる。最近の思想界に於て最も鮮明に此の實證主義的精神を發揮したものは、例のプラグマチズムであつて、此のプラグマチズムは自己の立場を明確に意識的に理想主義に對立させてゐる。殊にジエームスやデューキーによつて發達されたプラグマチズムは、最も鮮明に實行本位を宣言して、極度に主觀的な理想主義に反對してゐる。實行本位の立脚地から觀れば、内面生活を本位として立つてゐることは、何となく無意義に感ぜられて、客觀的結



果のみが主として實生活に直接な意味を有つてゐるやうに考へらる。

斯やうな理想主義と實行主義との本領を區別すれば、吾々はそこから自然に此の二の主義又は傾向の長短をも明らかにすることが出来る。即ち理想主義の長所は深さを欲する内面本位主義に存するが、餘りに内面本位の一方に偏する結果、それは動もすれば實行や外的結果やを無視せんとする短所を有つてゐる。一層精確に言へば、内面からの生活を主張せんとする人は、自然の傾向として實行や外的行爲を疎んぜんとする短所に伴はれてゐる。内を重んずるころは、同時に廣く外をも重んずることが出来ないのである。丁度反對に實行本位の實證主義は、主として客觀的に外に向かつて活動する長所を備へてゐるだけ、それだけ内に向かつて主觀の活動に重きを置くことが出来ないといふ短所を有つてゐる。斯かる長所と短所とは、個人の場合に於ても明白であるが、更に社會とか民族とかの場合に於ても明確に認められる。例へばヨーロッパの中でも、ドイツとかロシアとかいふ方面に於ては、いづれかといへば理想主義的傾向が勝つて、實際方面は甚しく見劣りがする觀がある。過日暗

殺されたドイツのラーテナウの如きは、公然ドイツ民族は藝術や宗教や道德の民族であつて、決して實業や政治の民族でない。殊に政治はフランス人やイギリス人の長所であつて、ドイツ人が最も多く短所とするところであると言つてゐる。イギリスには實際主義的と理想主義的との二の傾向が備はつてゐるから、一概に批評することは困難であるが、大體から言へば、實際主義が勝つて理想主義の脈が微弱であつたことも争はれない。單に民族の上ばかりでなく、更に時代の上にも同じやうな長短が見られる。例へば歐洲十八世紀の啓蒙思想時代は大體實際主義的であつて、哲學や藝術の脈はさして活潑でなく、これに反して十八世紀末から始まつた理想主義的時代は、必ずしも特殊な意味に於て實際的とは言はれなかつたのである。

斯やうに理想主義的傾向と實證主義的（若くは實際主義的）傾向とは、各々本領を異にし且それ／＼長短を異にする全然別種な態度であるから、本來を言へば、二の態度が調和して互に長所短所を補ひあへば、そこに文化の完全な發達が見られるのであるが、實際に於ては兩傾向は決して然かく容易に一致せず、寧ろ互に衝突して



一方が他方を征服しなければ已まないやうな勢を見せてゐる。然かも此の衝突又は軋轢が、普通の場合に於ては、其の本質が明らかにされないため、本來何を意味するか、甚しく不明瞭であることを免れない。思想界がこれがために混亂に陥つたためしは古來決して少なくない。現に今日の我思想壇に於ても、此の種類の衝突や軋轢は斷へず隨處に行はれてゐる。理想主義的態度の人が實際主義的態度の人を輕蔑し疎外することは古來の慣例であるが、こゝでは私は主として實證的態度の人が理想的態度の人に加へた非難攻撃を考へて見たい。蓋し現代人は或意味ではことごとく實證的態度の人であるから、世間は知らず識らず今日まで理想主義の態度を非難し來たつたのである。即ち今日まで普通に主張されたところによれば、人間に取つては實行が第一義である、實行に伴はれない思想は空想である。如何ばかり微妙な思想も、如何ばかり深秘な愛情も、それが實行に伴はれないかぎりには、すべて空想に過ぎないと。若し此の主張が單に實行を強めるだけの意味ならば至當であらうが、すべての思想生活をも單に實行のための手段と解する意味ならば、それは到底不當な

主張であると言はなければならぬ。先づ普通に用ひられる實行といふ言葉からが甚しく曖昧である。廣く實行といへば、單に外的實行のみならず、更に内面生活に於けるアクションまでも含まなければならぬ。内的動作が最初であつて、外的動作は其の自然の結果に過ぎない。故にまだ外に現はれない思想生活さへも實は既に立派な實行であつて、ひとり外的動作のみを實行と呼ぶべき理由は無い。思想そのものは、本來外的動作に現はれるが普通の順序であるから、其の意味に於ては、思想生活は直に實行であるとも言へる。何故内面的動作は手段であつて、外面的動作のみが目的と考へらるべきであらうか。何故外的結果のみが目的と考へられて、内的動作は單に従屬的手段としか考へられねばならぬであらうか。それは要するに實際主義的態度を以て總てを獨占せんとする主張に外ならない。

斯かる偏頗な主張は、單に普通のジャーナリズムの中に見出だされるのみならず、精確を期する哲學の中にさへも屢々發見される。多數の實證主義者に取つては、實行とか結果とか主要目的であるから、例へば藝術とか宗教とか學術とかいふた



ぐひのものは、それみづからに價値を備へてゐるといふよりも、主として實行とか結果とかのためにそれぐひの價値を備へてゐるといふ風に考へられる。現に知識とか眞理とか哲學とかは、プラグマチズムに取つては實行のためのインストリユメントであり、又インストリユメントとしてのみそれは善であり價値を備へてゐるのであるから、此の根據をすゝめて行けば、藝術でも宗教でもことごとく實用のための手段であり方便でなければならぬ。理想主義が主張する文化の多數は、實用本位主義からは大抵手段であり方便であらねばならぬ。即ち結果や實行だけが絶對の目的であつて、主觀性を帯びた生活はたゞ從屬的な第二義的な價値のみを有つてゐると考へられる。果たしてこれが公平な觀察と言へるであらうか。

斯やうに考へてくると、理想主義が主張する内面本位の生活——嚴格な意味の文化生活は、實行主義が主張する外面本位の生活と並んで、どこまでも獨自獨得の絶對的價値を備へたもので、決して外的生活のための手段のみとは考へられない。一層精確に言へば、外面的な實行生活——即ち實際生活も、廣い意味では文化體系の中

に含まれるものであるが、假にこれを獨得の本領を備へてゐるものとすれば、他の文化生活——即ち或は藝術的な或は道徳的な或は哲學的な或は宗教的な文化生活は、實際生活に對して、當然獨自獨得の本領及び價値を備へてゐるものと言はなければならぬ。一方が他のための手段であり方便であるといふことは、如何にしても無寛容な偏狹な主張であるを免れない。内面からの生活を主張する理想主義は、現實的結果を眼目とする實證主義と並んで、十分其の獨得の本領が認められなければならぬ。

私は此の點に於て、特に經濟生活と他の文化生活との關係を考へて置きたい。元來私は最も廣い意味に於て文化體系の基礎に特に經濟生活を置くべきだといふ考を有つてゐる。故に其の意味に於ては、經濟生活は他の文化生活と同様に取扱はるべき問題である。然かも便宜上經濟生活を他の文化生活に對立して考へ、更に此の經濟生活をば實際生活の中心と考へることが出來るとすれば、此の意味に於ける經濟生活と他の文化生活との關係は、これまたそれぞれ獨自獨立の本領と價値とを備へ



てゐるものであつて、決して一方が他方を方便視し、從屬視すべきでないことは明白である。此の點に於ても普通には經濟生活だけが目的であつて、他の文化生活は單に經濟生活の餘剰か又は附屬であるやうに考へられてゐる。經濟問題やそれに關した社會問題を取扱つてゐる人々から見れば、哲學や藝術や宗教等に關係してゐる人々は、何となく出世間的な又は眞實の人間生活からは甚しく遠ざかつた態度を取つてゐる者のやうに考へられる。經濟價值だけに絶對性が與へられて、他の文化生活には相對的價值しか與へられない。これが果たして公平正當な判斷といへるであらうか。

## 第五

私は簡單に此の論文の結論を記して置きたい。我國の今日までの思想界はひとり實證主義的傾向又は實際主義的傾向だけが勝つてゐて、理想主義的傾向又は文化主義的傾向は餘りに微弱であつた。實際主義が全思想界を支配して、眞の文化主義は

殆ど全く無力であつた。たゞし斯く言ふ意味は、我國に於ては實際主義が美事に發達し進歩したといふ意味ではない。僅に實際主義の脈が我思想界に存したといふ意味に過ぎない。然しながら、一層高く一層公平な立脚地から批評すれば、單に實際生活のみならず、一層複雑微妙な文化生活は、それみづからに於て絶對の價值を備へてゐるものであるから、明確に此の方面の絶對性が認められて、其の意味に於ける文化生活の本領が發揮されることは、今日の我思想界に於ては最も必要且緊急なことではあるまいか。眞の文化生活の絶對性が認められることは、日本文化の進歩のために最も緊急なことではあるまいか。道德藝術哲學宗教等の高い文化生活の本領が發揮されないで、他の實際方面のみの發達によつて、廣い文化の進歩を圖らうとするは、餘りに無意味に餘りに近眼的に且餘りに幼稚な考へかたではなからうか。今や我思想界は或意味に於ては、一種デカダン風な混濁した状態に沈みつゝあるやうに感ぜられる。文化の根本精神に恐るべき缺陷が存することは、今日の状態を來たした上に重大な關係を有つてゐると想像される。



或は私が用ひた理想主義といふ言葉には語弊が有るかも知れない。正しい意味の文化主義が一層適切な言葉であるかも知れない。即ち私は單純な實利主義に對して純粹な文化主義を主張する者である。

## 文化主義の根柢

### 第一

廣い意味の文化といふことは、本來の語義に従つて一定の精神文化——一切の精神力の調和的發達と解釋されて差支ない。そしてまた一層哲學的には——乃至カント先驗主義の哲學に従つて——文化とは人類に先天的な規範乃至價值に従つて普く認識道德藝術宗教の進歩を實現することと考へられても更に差支ない。否それが本來の文化の意義であらう。随つて文化主義とは、人間性の根柢に先天的な普遍的な規範や原理やを認めて、其等の規範原理に従つて一般學術道德藝術宗教の開發を人類生活最高の目的と立てることと解釋される。

單に斯やうな廣い意味の文化主義に關しては、特に異説を立てるまでもなく大體明白であつて、世間の意見もほとゞ之れに一致してゐるやうに考へられる。然かも更



に其の内容に打ち入つて一層精密な考察を行はうとすれば、そこにさまざまの異説が起こつてくる。文化の内容は、普通の理想主義に従つて、大體學術道德藝術宗教であるとしても、此等各種文化の關係は如何、殊に其の中のいづれが中心であつて、全體は如何やうに統一されるものであらうか。そこにさまざまの困難な問題が有る。例へばフイヒテは文化の中心を道德と考へ、道德的活動即文化と考へたやうである。然るにヘーゲルは、宗教藝術及び哲學をば道德や政治の上に置き、藝術宗教哲學の中でも純粹概念的な哲學が文化活動の最高であると考へた。これに對してロマンチズムを代表したシェリングが甚しく藝術至上主義に傾いたことは、これも著名な事實である。私はこゝで此等の問題に涉つて、單に文化の中心意義を明らかにしようといふのではない。文化の中心意義——隨つて文化主義の中心意義は此の論文の本意でない。こゝでは單に文化主義に關係する一層制限された特殊な問題だけを考察しようとするに過ぎない。

文化主義に關する特殊な問題とは外でもない、一般文化と藝術との關係問題これ

である。一般文化の上に於ける藝術の意義如何。藝術は一般文化の上に於て果たして如何なる位置を占めるものであらうか。道德や學術やに對して、そは果たして如何なる位置を備へてゐるものであらうか。これが私がこゝで簡單に取扱はんとする問題である。

此の問題に對して私は最初から私の立場を明らかにして置きたい。文化の根柢は藝術であり、文化主義の根柢には殊特の藝術尊重主義が無ければならない。これが私の立場である。世間には文化や文化主義を唱へながら、一般藝術に對しては極めて冷淡な又はむしろ反對な態度を取る人が多い。文化の開発といふことは、藝術の進歩などゝは何等の關係も無いやうに考へてゐる人が多い。よしまたそれが文化に多少の關係が有ると考へても、文化と藝術との關係は極めて淡薄なものに過ぎないと觀てゐる人が多い。文化主義者であつて藝術などを考慮の中に入れてゐない人さへ有る。斯かる世間の風潮に對して、私は先づこゝに文化主義の根柢には必ず藝術主義が無くてはならない所以を主張せんとする者である。こゝは何等斬新な意見でもな



ければ、又特に獨創的見識として誇るべきものでもないが、藝術に對する世間の無理解に對しては、私は特に此の主張の意味を明らかにしなければならぬ。

文化主義の根柢には藝術主義が無ければならない。私は此の主張をば、狭い文壇の人に向かつてよりも、寧ろ主として廣い世間に向かつて解釋して見たい。殊に今日のやうな時勢に於て、私は斯くの如き主張は特に深い意味を有つてゐると信ずる。言ふまでもなく今日は極度に實際的な時代である。文化や藝術を口にするさへ如何がはしく感ぜられるほど極度に現實的な時勢である。然しながら一步深く考へれば、此の實際問題を處理して行くものは、矢張人間の精神であり心であり思想であり感情である。人間の精神や思想はどうでもよい、たゞ當面の實際問題さへ處理さればそれでよいとは如何にしても言はれない。實際問題がどんなに處理されても良いわけではなく、如何やうに又如何なる方向にそれが處理されるか、問題であるかぎり、今日のやうな時勢に於ても、依然として人間の精神や心や思想や感情やは、實際問題の處理と並んで、先づ第一に刷新され改造され涵養され發育されなければならぬ。

い根本問題である。徹底的に言へば、改造の根本は人間である、人間の改造を外にして、果たして改造問題が考へられるであらうか。

然るにつらく時勢の成行きを見るに、吾々が深く考へ遠く慮ばからなければならぬ問題は山のやうに積まれてゐる。當面の實際問題と並んで、最もラディカルな最も根本的な思想問題や精神問題やが最も迅速な勢ひを以て吾々の眼前に迫り來たりつゝある。就中吾々が特に茲で考へて見たいことは、最近の議院政治の状態によつて暴露された國民の精神生活に關する暗黒面である。此の暗黒面——少なくとも民心の裡面にまつはつてゐる暗影——をば吾々は簡單に何と呼んで宜いか知らない。たゞ特に吾々に強く感ぜられることは、一般民心が甚しく殺風景であり、殺伐であつて、殆ど全く高い若くは深い情味を缺いてゐるといふ一事である。單に知識の方面から言へば、我國民は相當に敏捷な能力を備へてをり、純理の上からは何事も相當に理解し得る長所を備へてゐる。それにも拘らず、深く感情の根本から動かされて、本能的に若くは尊い感情に導かれて、高く美しい情味に満ちた行動を取る



といふやうな方面は甚しく我國民に缺けてゐる。すべてが理窟一邊で、餘りに殺伐に餘りに無風流に、深く暖い情味に缺けてゐるが、殊に現代をつゝんでゐる暗影のやうに考へられる。國民性から胚胎した必然の結果か、ただしは時代の特別な傾向か、感情の根柢から又は情操の根本からの訓練と發育とを缺いてゐるが時代の通弊であるやうに考へられる。勿論急激な時勢の變化に、一般人心は甚しく狼狽して戸惑ひしてゐるわけであるが、然かも元來本能的に感情的に訓練された國民は、今日のやうな時代に於ても、殆ど本能的に自己の進むべき途を取つて誤らない。たゞあわてふために、喧々囂々蠻力の發揮をこれ事とするやうな状態は、如何にしても深い情的訓練を経た國民の行動とは思はれない。

藝術の目的は必ずしも情的訓練ではない。然しながら藝術の効果は、必ずや情的訓練に及ばなければ已まない。民心を文化し若くは文化を高める爲には、先づ藝術の普及と發達とによつて、民心を情操の根柢から洗練し發育させることが、今日の急務ではないか。情操的發育を缺いて、いづこに文化の美しい花が咲き出でやう。

例へば外交的に日本は今日全く孤立の状態に陥つてゐるといふ。排日の風潮は殆ど世界の流行であるといふ。而して其の根本原因は主として我國の軍閥——否今日までの軍國主義に在ると言はれる。軍國主義の一語、これ確に今日の我國勢を代表してゐる言葉ではないか。假令表面に軍備的裝飾が有つても、若し内面に高く深い情操的文化が備はつてゐれば、世界は決して其の國を野蠻國として取扱はない。世界が我れを軍國主義者として取扱ふは、我れの人格に内面的の深さと裕さとを缺いてゐるからで、此の内面的の深さを缺いてゐるかぎり、我れは如何に軍國主義者にあらず野蠻にあらずと辯じたとして、所詮斯やうな辯解が徹るわけのものでない。排日の風潮がますます高く、全世界から敵として取扱はれてゐることは、吾々が深く反省しなければならぬ大問題ではないか。外交の失敗もあらう、軍國主義の弊もあらう。けれども主としては一般民衆が人格の内面性を缺いて、甚しく輕薄に殺伐に野鄙に流れてゐる點が、おのづから他國人に最も不快な印象を與へるのである。

斯やうに考へてくると、最も廣い意味に於ける又最も根本的な意味に於ける一般



民衆の教育といふことは、今日のやうな極度に實際的な時代に於ても、決して閑問題として取扱はるべきものでなく、寧ろ反對に當面の實際問題にも増して最も切實な最も重要な又最も根本的な問題であると言はなければならぬ。即ち最も厳格な意味に於て謂ふ文化問題は、普通に考へられるやうに、決して平和な時代の平和な問題ではなく、寧ろ當面の實際問題中の最も根本的にして又最も重要な問題であることが知れる。而して藝術就中文藝は、民心を情操の根柢から活動させ發育させて、之れに深く裕な内面性を與へるものであるとすれば、藝術活動はやがて文化の根本であり地盤であることが明白でないか。深く裕な情操的開發を外にして、いづこに文化の眞義が求めらるべきであらうぞ。

## 第二

文化の根柢が藝術であることは、先づ理論に訴へるよりも實例に徴すれば明白である。古來文化國の標本といへば、必ず先づ古代ギリシヤが數へられる。ギリシヤ

の文化は、一切文化の淵源であり、又同時に一切文化の見本である。斯やうなギリシヤ文化の根柢はそも／＼如何なるものであつたかを考察するに、勿論ギリシヤの學術、道德、宗教、政治等が其の文藝及び藝術と合して、渾然たる全文化を成したは言ふまでもないが、其の根柢は明らかにギリシヤ人獨得の藝術活動であつたと考へられる。廣い意味に於ける學術がギリシヤ文化の重要な成分であつたは言ふまでもないが、嚴密に謂ふ科學及び科學的知識が其の主要素乃至根柢であつたかは甚だ疑はしい。此の場合吾々は本質に於て藝術的な又は藝術に近い性質を有つた哲學や哲學的思索をばエクザクトな科學や科學的知識から截然區別して考へなければならぬ。科學や科學的知識は、必ずしもギリシヤに始まつたものでなく、主としては近代ゼルマン民族の手によつて造り出されたものであるといふチエンバレーン一流の解釋は、明らかに甚しい偏見であるとしても、エクザクトな科學的知識は、ギリシヤ人によつて、僅に其の基礎を据ゑられたまで、ギリシヤ文化のエッセンスが此の科學であつたとは如何にしても考へられない。文化の他の要素に比較すれば、科學の發



達は寧ろ頗る貧弱なものではなかつたか。況や科學的精緻といふ能力は、主としてギリシヤ國有の精妙精緻な藝術活動に胚胎したに於てをや。更に況や科學の創造といふ偉大な事業は、主として藝術的創造の力に基づいたに於てをや。

科學的知識さへもギリシヤ文化の精髓でなかつたとすれば、況や道德や政治やが其の根抵であり精髓であつたとは尙更考へられない。ギリシヤの政治や道德が、後世まで種々な影響を與へたほどに、光彩陸離たるものであり、随つて其の意味に於てギリシヤ文化の重大な要素であつたは争はれないが、然かも文化の他の要素を除き去しても、尙これのみでギリシヤ文化の色彩は十分であると言はれるまでに、それほど政治や道德やが偉大であつたとは考へられない。ギリシヤ文化の神髓は、飽までこれ以外の他の方面に存したと斷言される。

斯くしてギリシヤ文化の精髓は、今日まで普通に批判されたやうに、依然として其の獨得無二の藝術及び藝術活動に存したと言はなければならぬ。ギリシヤ文化の根抵が藝術活動であつたことは、今日最早何人にも疑はれない明白な事實であつた

としか想像されない。たゞ世人はギリシヤ人が藝術的であつたことをば、甚しく單純にか又は甚しく皮相的にしか考へてゐない。例へばギリシヤ人は調和の趣味を備へた國民であつたとか、又は一種のアトチスチック、センスを備へた民族であつたとか、又は普通の意味に於て謂ふ上品な種族であつたなどいふ解釋これである。斯やうな解釋は、いづれも極めて皮相的にギリシヤ文化を説明したもの、未だギリシヤ文化の眞相を知らない者の解釋に外ならない。私はこゝで細かにギリシヤ固有の藝術活動を解釋する餘地を有たない。たゞ極めておぼまかに言へば、一面に於てギリシヤ人はすべて茫漠なもの無形なものを有形にし精確にする極めて精妙なタレントを備へてゐたと同時に、他面に於て彼等は事物を其の精髓まで最も深く鋭く敏感し得る内面的傾向を備へてゐた。ギリシヤ人の此の深味ある内面生活をば吾々は今日僅にホーマー、エスキロス、ソフォクレス等の詩篇を通じて窺ひ得るのみで、精確なことは到底之れを採知する便宜が無い。ニイチエが古代ギリシヤ人の特徴と説いたディオニソスの深刻——神祕な音樂の情味に酔ひしたつたといふ古代ギリシヤ人の傾向は、



たゞおぼろげにしか之れを想像することが出来ない。ギリシヤ人の深い音樂的傾向は、確に彼等獨得の藝術的傾向で、彼等の教育——藝術教育——が單純に音樂と名づけられた事實に徴しても、其の一般は容易に想像される。プラスチックな平面的傾向と並んで、彼等ギリシヤ人が如何に深い内面的傾向を備へてゐたかは、後年ドイツのネオロマンチズムに屬した詩人音樂者たちが、一齊にギリシヤ文化の繼承を標榜して、まつしぐらに音樂的な内面的な神秘的な傾向を取つて進んだことに徴しても明白である。リヒャード、ワグナーやニイチエやが音樂的深刻と音樂的富麗と音樂的神祕の中にギリシヤ文化の精髓を見出ださうとしたは、決して偶然ではなかつたのである。

ギリシヤ人は斯やうに豊富にして深刻な内面生活——豊富な藝術活動を備へてゐたればこそ、單に獨得無比な貴い藝術品を後世に残したのみならず、此の藝術活動が學術道德宗教政治等あらゆる方面に深刻な影響を及ぼして、ギリシヤ文化は、これによつて、初めて世界に覇を唱へ得るに至つたのである。ギリシヤ獨得の精確な藝術

的傾向がエクザクトな科學的知識の發達に深い關係を有つてゐたことは、前段既に指摘したとほりであるが、就中ギリシヤの神話や宗教やが、特殊な藝術的傾向の補助によつて發達したものであることも、史家のすべてが一致してゐる判斷である。事實吾々はギリシヤのミソロジーと藝術とを分離して考へることが出来ない。ミソロジーから詩歌を取つてしまへばミソロジーが無くなると同じく、ギリシヤ藝術を取つてしまへば、ギリシヤ文化は果たして文化として後に残るであらうか。政治や道德さへも藝術活動と極めて親密な關係が有つたことは、ペリクレスを初めとして、有名な政治家や乃至は道德哲學を立てた多數の哲學者たちが、一様に豊富な藝術的才能を備へて、政治家であつたと同時に詩人であり、哲學者であつたと同時に詩人であつたことでも明白である。深い人格の内面から發現した政治であり道德であつて、初めて眞の政治たり道德たり得るのである。政治も道德も畢竟は内面生活から現はれる一種の力に過ぎないではないか。内面生活といふ深い根柢を缺いた政治や道德ほど無力にして厄介なものはない。



すべて文化を構成する各要素——藝術、哲學、學術、宗教、道德等——の價值は、それ等の各々が人格化の上に及ぼす影響の廣狹深淺高低優劣等によつて、それ／＼批判され價值つけられる。一層精しく言へば、此等の要素が人格の、いよ／＼廣い方面に涉つて影響を與へ、然かも其の影響が人格の中心まで透れば透るほどいよ／＼深刻であり、更に其の影響が人格の自然の發育をいよ／＼深く助長するものであればあるほど、斯くの如き要素はいよ／＼高く尊い價值を備へたものと考へられる。蓋し自然の發育を助長するやうに人格の變化に影響を與へることは、これやがて人格を文化しカルチベートする所以で、人格化の力の大なることは、やがて文化の力の大なる所以に外ならない。斯やうな意味に於て、人格化即ち文化の基本となり根抵となる要素は何ぞと言はゞ、私は矢張藝術若くは藝術活動であると答へざるを得ない。藝術活動が先づ人格を文化し發育させるさまは極めて自然的であり且普遍

的である。學術の如く概念若くは抽象的理論の力に頼らず、具體的な感性と直覺とに基づいて、吾々をして直に事物の生命に觸れしめるものが藝術である。シレルの言葉を借りて言へば、人間として自然のまゝに感性のまゝに野蠻な肉慾インリヒカイト一邊から解脱して一層精神的な方面へ向上せしめるものが藝術である。藝術の力によつて人類は自然のまゝに感性のまゝに具體的な活きた知識と直覺とを蓄積することが出来る。概念的知識は勿論科學的であり方法的であつて多少不自然たるを免れないが、此の點に於て藝術は一層自由にして自然であるといふ長所を備へてゐる。自然にして自由であるから藝術はまた廣く何人でも之れを製作し若くは賞翫し得るといふ普遍性を備へてゐる。最も精確な意味に於て民衆的と言はれるものは恐らく藝術であつて、藝術ほど多數の民衆にエンジョイされるものは他に類例を求めがたい。民衆文化といふ上から見ても、其の根柢は矢張藝術であり藝術活動であると言はなければならぬ。

私はこゝで精しく藝術の特徴を述べる要はない。藝術が學術や理論と違つて、其



の影響が情操の全體及び根柢にまで及び、情生活の根本から人格を活動させる特徴を備へてゐることは、何人と雖も拒むことの出来ない大なる事實である。人格全體の上に成立する情調を變化し之れに微妙な影響を與へるものは藝術である。されば藝術は人間の靈魂を其の根柢から活動させる力を有つてゐる。情の根柢から人間を造り上げるものは實に藝術である。此の點に於て藝術は他の學術乃至道德等に比較して、一層微妙な特徴を有つてゐる。學術が人格の變化に及ぼす影響は、極めて着實であり眞實ではあるが、其の範圍が主として知識の一面に限られるところから、其の影響は遂に人格の中心まで通徹しない。人格の中心まで通徹しないから、其の影響はあほむね皮相的に外面的に流れて、動もすれば人格を輕薄化し淺薄化する恐れが有る。更にまた道德が與へる訓練や命令やは、勿論人格の活動に最も嚴肅な影響を與ふべき筈である。けれども道德の命令が斯やうに嚴肅に且深刻であるためには、其の命令は決して唯の于からびた理屈であつてはならない。情操の根柢に立脚しない唯の理屈一邊の命令は、到底人格に深刻な影響を與へ得るものでない。さ

れば道德的訓練や命令やが有効であるためには、其等が十分深く情操の根柢に立脚したものであることを要する。情操から胚胎する自然の命令であつて、初めてそは力ある道德的命令の形を備へてくる。故に詩人シレルが最も適切に解釋したとほり、藝術に頼る情操教育は、最も力ある道德的地盤であり、藝術的情操教育を缺いては、人は到底眞の道德的理想に達することが出来ないのである。されば道德樹立の見地から批判しても、藝術の情操的訓練は極めて重大な影響をもつてゐると言はなければならぬ。

藝術が人格の上に及ぼす影響は單にこれのみに留まらない、情操活動と並んで、他にこれには劣らない、見かたによつては一層重大とも考へられる影響をば人格の上に及ぼさなければ已まない。斯くの如き影響とは外でもない、創造作用又は創造的活動の助長即ちこれである。そもく藝術の生命が主として創造に存することは、これまで廣く世間に知られた事實であるが、其の十分の意味は今日と雖も殆ど全く理解されてゐない。然かも私はこゝで此の點に關する私見を細かに開陳する餘裕を



有たないから、單に創造は藝術の生命であり、藝術的創造が根本となつて有らゆる文化の發育に深刻な影響が及ぶといふ一事にエムファシスを置いて考へて見たい。藝術が興へる特殊の喜びをば私は飽まで創造の喜びであると解釋する。藝術は、普通の美學者によつて解釋されるやうに、決して假想とか夢想とか眞實とかを生命とするものでなく、眞偽の境を超越した創造そのものを根本の生命とする。人生又は人間の生命をいよ／＼高く深くエナージチックに創造すればするほど、それはいよ／＼高く深く大なる藝術である。此の意味の創造を取去れば、藝術は全然生命を取られた殘骸に過ぎない。單に藝術品の製作者が斯やうな創造作用に活きるのみならず、其の賞翫者とても製作者に倣つて特殊の創造を行ふのであるから、總ての人に取つて藝術は創造を生命とするものに外ならない。勿論創造といふことは、必ずしも藝術に限られてゐない。學術上の創造もあれば、實際上の創造も有り、更に工藝上の創造など限りが無い。然しながら創造の本質はどこまでも本能的感情的直覺的であるから、有らゆる種類の創造は、盡く藝術的創造を根本として、そこから各方

面に派生する特殊の發達に外ならない。故に學術上の天才は、大抵同時に藝術上の天才であり、實際上の天才とても同時に藝術的創造の天分を具備する者が多い。加之、實際上の行爲も學術も宗教も、すべて創造を取除いてはそれに進歩も無ければ精神も無いのであるから、藝術以外の他の文化は、すべて藝術的創造といふ根本生命に培はれて、初めてこれに生氣が備はり活動が生ずるとも考へられる。吾々はこゝにも特殊な意味に於ける藝術の普遍性を發見せざるを得ない。

前段私はギリシヤ文化の根柢は飽まで藝術でなければならぬ所以を主張した。而して其の理由は、ギリシヤ人は深い内生命を備へてゐたからと考へられた。私は今此の觀察に加へて、ギリシヤ文化の根柢には最も活潑な藝術的創造が動いてゐたことを特記せざるを得ない。蓋しギリシヤ文化の特徴は最も進歩的に最も創造的に且最も若々しく活潑であつた點に存したのであるから、藝術的創造が一切文化の根柢と成つてゐた所以で、此の創造的傾向を取去つたならば、恐らくギリシヤ文化は無かつたであらうと想像される。常に新らしく常に若やかに常に華々しく發達した



ギリシヤ文化は、ひとへに藝術的創造の賜物であつたと考へられる。

斯やうに考へてくると、藝術が一切文化の根柢であり地盤であることは、決して藝術主義に偏した癖見ではなく、寧ろ有らゆる方面から觀察して、遂に曲ぐべからざる眞理であることが明白である。藝術によつて創造的本能を養ひ、更に情生活の根本から人格を活動させることは、一切文化の地盤であると言はなければならぬ。

#### 第四

私は必ずしも藝術至上主義を唱へる者でない。又藝術が必ずしも文化の全體であると主張する者でもない。藝術至上主義が古來如何にロマンチックに空想に陥つたか位は十分承知してゐる。況や藝術以外に道德學術工藝等さまざまの意味の文化的要素が有る位は最初から十分に承知してゐる。然かも嚴格な意味に於ける文化の發達を圖らうとすれば、先づ其の根柢であり地盤である藝術若くは藝術活動の發達を圖らなければならぬ。藝術が文化生活の根柢であることは、今日まだ十分明確に世

間に認められてゐない。否、斯やうな意味が認められるどころか、反對に藝術の如きは、今日のやうな現實的な時代に於ては、全然無益であり有害であるやうにさへも誤解されてゐる。然るに一層深く文化と藝術との本質を考察すれば、今日のやうな現實的な時代に於ては、文化の根柢である藝術活動を發育させて、人格に内面性を附與することが愈々必須であり急務であると考へられる。今日の我思想界が智的には發達して情的に如何に大なる缺點を有つてゐるかは、前段既に指摘したとほりである。此の缺點に加へて、創造的本能の缺乏といふことは、これまた我國現代——或は恐らく我國民性の根本的短所であるとも考へられる。果たしてさうであるとするれば、藝術の發達によつて創造的本能を養成することは、我國文化のため必須缺くべからざる重大事であると言はなければならぬ。此の重大事が恐らくは容易に世間に理解されぬであらう。藝術をいつまでも一種の胴樂と解してゐる一般世間は、いつまでも此の重大事を理解することが出来ないかも知れない。吾々は今後とも有らゆる方面から此の重大事を廣く世間に向かつて主張しなければならぬ。此の論文は



# 文化の基礎としての藝術活動

## 第一

嚴密な意味に於ける精神的文化の全體から觀て、彼の藝術活動がそも／＼如何なる役目を演ずるものであり、又如何なる位置を占めるものであるかは、一面からは極めて明白なやうに考へられて、他面からは甚しく不明瞭な問題である。現に哲學歴史に訴へて見ても、此の問題の取扱ひ方は甚しく不確實であつたことが承認される。極めておほまかに言へば、明確に藝術活動の價値が認められたは、漸くカント時代に始まつたのであるが、カント以後此の問題の取扱ひかたが一定したかといふに決して然らず、今日に至るまで尙甚しく不確實たるを免れない。シェリングのやうな藝術至上主義の主張も有れば、ヘーゲル流の主智主義の解釋も有り、又英米等に流行する快樂主義の主張さへも有る。文藝家や藝術家は、文藝や藝術を一切文化

の最高に位するものゝやうに主張するに反して、普通には藝術の價値は極めて僅少にしか見つもられてゐない。何等か相當な價値——人生の慰藉とか娛樂とか修飾とか趣味とか、さまざまの意味の相當な價値は認められながらも、全文化の上から觀て、そも／＼藝術活動の位置如何といふ問題は、常に普通人によつてのみならず、識者學者によつてさへも、さながら重大な問題ではないやうに考へられてゐる。全文化の上に於ける藝術の地位は、例へば學術や宗教やに比較しては、殆ど比較にさへもならない低いものゝやうに考へられてゐる。ロマンチックな藝術至上主義が偏頗であるとしても、斯やうに藝術の價値を低く觀ることや、若くは極めてあやふやに之れを考へて置くことが、果たして正當なことであらうか。全文化の上に於ける藝術の位置を哲學的に明確にすることは、文化そのものに關して、極めて不確實な思想が行はれてゐる今日、取分け必要なことではなからうか。

たゞし茲で漠然文化といつても、其の中には經濟的、學術的、道德的、藝術的、宗教的等の各方面が備はり、而も實際的には、或は宗教方面が顯著であるとか、或



は學術方面がすぐれてゐるとか、必ず特殊な傾向を取つて現はれるものであるから、茲で概括的に文化といふ場合は、總ての方面が理想的に備はつた完全體を假想し、斯やうな概括的な又は一般的な場合に於ける文化の全體から觀て、同じく一般的な藝術活動がそも／＼如何なる位置を占めるものであらうか。これが茲で研究されんとする問題である。

## 第二

問題が餘り多方面に涉ることを恐れるから、藝術の本質論や價值論やは之れを避けて、専ら或特殊な方面から藝術の位置——文化上に於ける藝術の位置といふことを考へて見たい。然かも此の問題を精確に取扱ふためには、藝術の本質に關して、一ト通り論者みづからの所見を明らかにして置く必要が有る。藝術そのものに關する思想が亂雜である今日に於ては、特に先づ個人の意見を明らかにして置く必要が有る。

今日までの美學説の傾向を見ると、藝術活動の解釋に一種の主智説と主情説との二類が有る。主智説の特例としては、まさしくイタリーのクロオチエなどを擧げることが出来る。此の美學者は、殆ど極端と思はれるまで情緒活動を排斥し、藝術活動の本領は飽まで直觀でなければならぬと主張する。言ふまでもなく此の美學者の直觀とか表現とかは、精確には直覺的創造の意味であつて、學術的又は論理的ならざる直觀的創造が藝術の生命であると觀られる。一層精しく言へば、論理的な抽象的觀念の手段に頼らず、活き々々とした具體的觀念を素材として、そこから新らしい人生の種々相が直觀的に想浮べられ創造されることが藝術で、此の意味の直觀的創造を外にしては藝術は考へられないと。これがクロオチエの解釋である。

然るに主情派の解釋や、普通の藝術批評家の解釋によると、特殊の情調を帯びた感情又は情緒が藝術活動の中心であつて、藝術活動といへば、主として此の情緒經驗を意味する。美的情味が一切であつて、情味なしには藝術は成り立たない。現に藝術的創造の中心となるものは情緒であつて、特殊の情調が特殊の創造を行はしめ



るに外ならない。天才は情緒の力によつていみじき想像を完成する者に外ならない。故に藝術活動の中心は、飽まで特殊の情緒活動でなければならぬと。これが主情派の解釋である。

按ずるに、此の兩派の解釋は、畢竟同一藝術活動をば、それ／＼異なる方面から觀察したもので、眞理は兩面の觀察を總合したものゝ上に存すべきは明白である。直觀的であるといふも、情緒的であるといふも、互に一面に偏した解釋であつて、單にそれ／＼の半面のみからは、藝術活動の全體は解釋されがたい。現に事實に就いて觀測すれば、藝術が必ずしも主智的であるとも、又は反對に主情的であるとも説明しがたいことは明白である。蓋し各種の活動中、茲に謂ふ藝術活動ほど情緒的なものはなく、然かも同時に直觀的なものは無い。此の場合に於ては、他の場合に於ける如く、直觀が主體であるとも言ひがたければ、又感情が主體であるとも説明しがたい。活きた具體的な内經驗 (Erlebnis) は、直觀的であつて、同時にまた強い意味に於て情緒的である。藝術の範圍は、どこまでも此の意味の内經驗に存する。

藝術家が體驗した此の内面的エルレイベンこそは、藝術が因つて築かるべき地盤であり素材である。此の意味のエルレイベンが、主智的とも主情的とも孰れとも解釋しがたいものであることは極めて明白である。何となれば、一面から觀れば、藝術は人生の種々相を直觀することである。最も廣く又は最も深く人生の種々相を具體的に活き々と直觀するが藝術の本領である。人生の種々相の直觀といふことを取去つては、藝術は全然無意義である。たゞの快感、又はたゞの感情といふことに藝術の意味は無い。美的ゲニーセンは、人生の直觀の上に宿る情味であつて、決して無意味な情味の意味でない。斯くして直觀といふ智的活動は、どこまでも藝術活動の中心でなければならぬ。

然るに人生の直觀には、最も顯著な意味に於て、特殊な情調が纏綿する。殊に人生の内面が最も深く直觀された場合には、そこに説明しがたい最も深く且最も微妙な情緒活動が喚起される。情味の經驗なしに吾々は各種の經驗を行ふことは出来ない。人生の種々相の中でも、取分け其の最も深いもの又は最も微妙なものは、直に



至深な情活動そのものであるから、假令其等至深の情活動は、例へば音楽のリズムやメロデーイやの場合の如く、それ／＼の直観的形式によつて感受されるとはいへ、斯かる場合に於ては、純粹の情活動がさながら藝術活動の中心であるやうに感ぜられる。學術の論理的特徴に對して、藝術の情緒的特徴が指摘されるは、決して偶然でない。

斯くの如く藝術活動は直観と情緒との總合である内面的經驗を土臺とするものであるが、然しながら、單にこれだけでは、藝術活動の本領はまだ全く不明である。茲では固より厳格な意味に於ての藝術の本領論に入るだけの餘地はないが、本論の主旨を明らかにする範圍内に於て、簡單に此の本領論に觸れなければならぬ。前段概括した内面的エルレーブニス——藝術家が經驗する直観的及び情緒的なエルレーブニスは、勿論藝術が因つて以て造らるべき素材であり地盤であつて、まだ藝術の精髓又は藝術そのものではない。藝術の精髓はいづこに在るかといへば、言ふまでもなく此等の素材を鹽梅し配合する所謂成形作用 (Gestaltende Thätigkeit) に存するは明

白である。藝術家の直観的及び情緒的な内經驗は、其の特殊な成形作用によつて一種の統一された微妙な形に造りあげられ、そこに初めて藝術が成立つのである。或は茫漠なエルレーベンに活き々々した明確な形象を興へるとか、或はギジョナリーに微妙な形式を造り出すとか、或は無意識的天籟に導かれて巧妙な想像を行ふとか、さまざまに觀察され解釋された此の特殊の成形作用に關しては、到底こゝで其の本質を解釋すべき限りでない。此の成形作用の本質は如何にもあれ、此の微妙な作用は、畢竟創造——素材を基としての創造を中心とするものであるは疑はれない。吾々はこゝに藝術の本領の一端を見出だすことが出来る。藝術家が自家の内面的經驗を基礎として、其の上に種々な意味に於て新らしい人生の種々相を統一的に創造するが即ち藝術の本領に外ならない。種々な意味に於てとは外でもない、藝術家の手によつて 日常の實際生活とはさまざまな點に於て異なる新らしい生活が造り出されることを意味する。所謂現實の實生活を其のまゝの形に於て寫眞に採るが藝術的創造ではなく、藝術的創造といへば、どこまでも藝術家の主観のはたらし——積極的な



主觀の創造作用の活動でなければならぬ。藝術家の創造作用は時代の傾向に従つて、勿論さまざまに變化する。現實を尊重する客觀時代と、理想を尊重する主觀時代とによつて、藝術家の創造作用にもおのづから變化が起つてくる。然かも現實尊重の場合に於てさへ、藝術家は決して單に現實生活を其のまゝ寫眞的に採影する者ではなく、必ず此れに新らしい統一や組織やを興へ、或は普通には見落される新經驗を加へ、或は之れに特殊な深みや高さやを加へるなど、藝術的創造の力を俟たなければ、そこに統一された活き々々した人生は決して造り出されるものでない。況や理想尊重の主觀的傾向が強い時代に於ては、藝術的創造はますます積極的となるに於てをや。例へば最近ドイツに於て主張される表現主義 (Expressionismus oder Ausdruckskunst) の如く、極度に主觀を白熱化して、其の強められ昂められた主觀を藝術的に表現せんとするに至つては藝術的創造力はいよゝゝ積極的に傾かざるを得ない。いづれの方面から觀ても、創造は藝術の生命であつて、藝術即創造又は創造即藝術であることは、遂に疑はれる餘地が無い。たゞ斯くの如き藝術的創造が如何

にして行はれるものであるか。此の重大な疑問に至つては、到底こゝで簡單に取扱はるべき限りでない。

さて茲で斯やうに藝術的創造の問題にまで踏込んだは、之れによつて藝術的創造の本質を明らかにせんとするよりは、寧ろ一般藝術の効果——藝術活動が精神文化の上に及ぼすべき一般的效果を明らかにせんがために外ならない。一般的效果とは外でもない、藝術は最も明確に活き々々と人生を直觀することであると同時に、また人生を最も痛切に且最も深く翫味し體得することである。蓋し藝術的創造とは人生の現實的な又は理想的な種種相をば、日常の實際生活の斷片的なとは異なり、統一的に全的に然かもギョツドリにインテンシヴに直觀させ感得させる所以で、吾々は此の藝術的創造の力によつて初めて最も明確に且いきゝと人生の種種相を経験することが出来る。そして斯やうな藝術的創造は、單に藝術製作家のみの専有物ではなく、藝術の賞翫者も、藝術家に導かれて、同じ創造作用を行ふのである。故に人生の種々相の眞の翫味乃至經驗は、藝術の賞翫者に取つても製作者に取



つても、同一不二の事柄であつて、兩者に共通な現象である。最も廣く且最も嚴密な意味に於て、人生を斯く全的に且いき／＼とエルレーベンすることは、藝術的活動の中心作用であつて、而もそれが同時に藝術が與へる最も中心的な効果であると觀られる。人生を全的にいき／＼と經驗すること其のことが藝術の目的であり極意であつて、藝術は此の以外にさまざまの目的や効果や報酬やを求めする必要が無い。嚴格な意味に於ける人生の直觀及び感入は、どこまでも藝術の生命であり本領である。吾々は偏へに此の中心點からのみ藝術を考察しなければならぬ。

### 第三

藝術の本領をば、おほよそ上の如く解釋して、さて斯やうな藝術が文化全體の上に占める地歩をば、茲では簡單に藝術が他の文化に對する特殊な關係——藝術が他の文化に及ぼす影響といふ一點——から考察することとする。随つて豫めこゝで讀者諸君に斷つて置くことは、此の短論文に於ては、文化全體の上に於て占める藝術

の地歩をば、十分完全には觀察しがたく、僅に特殊な一方面のみから考察するに過ぎないといふことは是れである。管見によれば、藝術が全文化の上に占める地位は普通に考へられるより甚しく複雑であつて、到底こゝで其の全體が盡さるべきでない。此の短論文は僅に其の一端に觸れるに過ぎない。

便宜のため私はこゝで主として藝術が道德學術及び宗教に及ぼす根本的影響だけを考察して見たい。蓋し斯くすることによつて、私は藝術が一切文化の基礎——一切文化が因つて建設さるべき地盤であること、更に言ひかへれば、藝術活動の基礎又は階段なしには、他の文化は到底完全に發達しない所以をば、多少確實に説明し得ると信ずる。

さて藝術が道德學術及び宗教等に及ぼす影響を考察するに先だつて、廣く文化史の上から觀た藝術活動の効果を先づ記憶して置く要が有る。管見によれば、斯やうな意味の藝術活動の効果が十分明らかにされたは、ヨーロッパに於ても、漸く近代のことで、殊に此の點に於て、詩人シレルはさすがに鋭い直觀力を備へてゐたと考



へられる。蓋しシレルによれば、文化の曙光——文化の最初の光——は、主として藝術の力に基づいたもので、藝術が即ち最初の文化であつたと言はれる。シレルの言葉借りて言へば、全く感性的な肉感的な人間をば、初めて精神的な靈智的な方面へ轉じさせたは藝術であつて、藝術によつて人類は初めて感性以上の世界に導かれたのであるといふ。精緻や分析を主眼とする學術や、規律や秩序やを重んずる道徳や、乃至人間の全運命に關する信仰を中心とする宗教や、すべて此等は文化史的には藝術より後れて發達したもの——少なくとも其の完全な形に於ては、藝術より後れて發達したもので、文化の最初の光は、主として藝術によつて放たれたものと想像される。現に文化の最初の形であるミソロジは、本質的には藝術的要素が主體であつて、藝術的要素を取去つては、ミソロジは殆ど空虚であるとも判斷される。蓋し廣く天地人生を直覺的に藝術的に意識することは、一切文化の最初であり地盤であつて、同時にまたこれが最も普遍的な且根本的な文化活動であつたと考へられる。先づ具體的にいき／＼と人生を直觀すること、これが人類生活上に於る文化の最初

の出發點であり、同時にまた人類生活に普通な根本的事實であつたと解釋されざるを得ない。道徳が發生するにも、學術が發育するにも、先づ具體的な人生の直觀乃至經驗が之れに先だ／＼なければならぬ。先づ具體的にいき／＼と人生を意識して然る後に分析や道徳やが發達すべきである。藝術活動が文化の最初の階段であることは、先づ文化の最初に藝術活動が無かつたことを假想すれば明白である。先づ具體的に藝術的に人生を味はふことが無かつたとすれば、すべての文化はそも／＼如何にして發生し且發育すべきであらうか。先づ人生をいき／＼と味はふことなしに、如何にして人生が考へられ又は秩序づけらるべきであらうか。されば藝術的創造の力によつて、吾々が眞に人生の種々相を経験することは、普通に考へられるよりは重大な意味を備へたことで、これは實に一切文化の基本的事實であるとも解釋される。藝術的に深く人生を味はふこと、普通の實生活に於て斷片的にそれを味はふこと、其の間の距離が極めて接近してゐるだけに、藝術活動は最も原始的な然かも最も普遍的な事實であると解釋される。シレルが解釋したとほり、人類は藝術によつ



て初めて眞に人生を經驗し、又此の藝術によつて初めて人類生活が完成されるのである。

さて斯やうに藝術は文化の基礎的事實であるとするれば、道德や宗教や學術やが、いづれも藝術と密接な關係を備へて、藝術活動から最も直接にして且深刻な影響を受くべきものであるは自然の勢ひである。先づ藝術が道德に及ぼす影響から考察して見る。文化史的に考察して、道德の發達が深く藝術の影響に基づいたことは、極めて自然な事實であつたと判斷される。

勿論斯く言へばとて、道德は藝術から産まれたものと觀る譯ではない。自己保存に關する必要又は必然が道德發生の直接地盤であつたは言ふまでもない。然しながら、たゞ機械的な必要又は必然に驅られてゐる限り、道德はまだ極めて幼稚であつて、それは決して嚴密な意味に於て文化的と成つたとは言はれない。道德の文化的發達には、たゞ機械的必然的事實以上一層自由な一層文化的な地盤や背景やが無ければならない。こゝに於て吾々は、藝術活動が明らかに道德發達の重要な一要素であ

つたこと又あるべきことを認めざるを得ない。

此の事實を明らかにするためには、吾々は暫く文化史的考察を離れて、端的に藝術と道德との關係を考へるに如くはない。此の點に於ても、吾々は詩人シレルの深い直觀に敬服せざるを得ない。彼れは藝術は人間を道德に導く自然の階段であるとも最も明確に解釋した。即ちシレルの言葉を借りて言へば、感性のまゝに自然に吾々を道德に導くものは藝術である。藝術は純理に因らず、主として感情によつて自然に吾人を道德に導くものである。此の主張の中には深い眞理が含まれてゐる。藝術は必ずしも吾人を道德に導くを主眼とするものではないが、最も靈活に人生の種々相を教へ、且感情の根本から人間を活動させるが藝術であるから、吾人は藝術によつて少なくとも道德に向かふ地盤又は根據を造ることが出来る。蓋し道德は實行的意志の事柄であるが、然かも斯くの如き意志は、たゞ漫然意志として發生し且發達するものではなく、情緒的なエルレーブニスそのものを地盤として、其の上に發生し且發達するものに外ならない。道德が本來斯くの如き情緒的經驗を地盤とする



もの又はすべきものであることは、此の種類の地盤を缺いては遂に眞の道德の發達を期しがたい事によつても明白である。現に今日行はれてゐる道德教育の如きは、單に道德の理論を注入することであつたり又はたゞ頭から無理無體に實行を強ふることであつたりして、感情生活の根抵から自然に人間を導くことでないから、實際上の効果は極めて薄弱である。随つて完全な意味の道德的發達は、必ず情生活の根抵から最も廣く且最も深く人生を經驗し感得した者でなければ、到底これを望むことが出來ない。而して斯くの如き地盤又は背景は、明らかに藝術活動によつて造られ若しくは養育される第一階段であり根抵であることは到底争はれない。眞に人生の情味を經驗した者のみが初めて完全な意味に於て道德的たり得る。たゞし藝術活動は直に道德活動ではないから、藝術家が直に道德家ならざるは言ふまでもない。

藝術が道德の上に及ぼす影響は斯くの如く密接であるから、文化史的にも、乃至は廣く道德の進歩のためにも、藝術活動が最も微妙な隠れた地盤であり根抵であることは明白である。随つて若し藝術活動といふ地盤が缺けたならば、廣く道德の進

歩發達が甚しく阻害さるべきことも争はれない。全く藝術なしに果たして道德の發達が望まれるであらうか。藝術は即ち道德的文化の地盤であると解釋さるべきでないか。

#### 第四

更に藝術が宗教に及ぼす影響に就いて考察する。道德の根抵に藝術が必要であると同じ意味に於て、宗教の根抵にも矢張藝術が必須缺くべからざるものではなからうか。勿論宗教は藝術でない。藝術が直觀的情緒的であるに對して、宗教の中心生命は信仰であり意志である。されど此の場合に於ても、其の信仰や意志やば、其の根抵に何等の根據も背景も無い信仰乃至意志ではなくして、必ず直觀的な情緒的な根抵を備へたものでなければならぬ。直觀的な情緒的な精神活動が根抵となつて、其の上に自然に築かれた信仰や意志やが宗教の本體に外ならない。事實、宗教的意識の全體を取つて調べて見れば、其の根抵又は大半は殆ど全く藝術活動によつて満たさ



れてゐるではないか。管見によれば、一切の文化は藝術と密接な關係を備へてゐるが、宗教と藝術との關係ほど親密なものには他に見出だされない。全く藝術活動を取除いては、吾々は宗教意識を考へることが出来ない。文化史的に又は宗教史的に考察しても、宗教と藝術との密接な關係は極めて明白である。ミソロジーは、一面から觀れば藝術であつて、他面から觀れば宗教的產物である。原始時代に於ける宗教は、殆ど全く藝術的であつて、藝術味を取去つては、宗教は無くなつてしまふ。單に原始時代のみならず、宗教の發達は、最も密接に藝術の發達と聯關してゐる。一面から觀れば、藝術が宗教的意識の產物であるやうに、他面から觀れば、宗教は藝術的意識の產物とも見へる。現に佛教やキリスト教や、いづれもそれらの藝術活動を地盤とし背景としたもので、此の地盤や背景やがそれらの宗教と最も密接な關係を有つてゐる。

宗教的意識の實體を檢查して見れば、それが如何に強く藝術的意識に類似してゐるか明白である。深い感謝の心持も、一切を捨てた歸依の心持も、深い満足に充た

された安心の心持も、廣く人類の運動に關する深い々々冥想も、ことごとく之れを藝術的と觀れば觀られるもので、宗教と藝術とはまさに合致して一體を成してゐるとも見られる。反對にまた廣く人生に關する深い々々藝術的趣味は、それみづから既に宗教的であつて、こゝにも藝術と宗教とはさながら一體を成してゐるやうに見える。斯くの如く藝術は宗教の直接地盤であるから、宗教の發達のためには、先づ藝術的地盤が豊富でなければならぬ。藝術的地盤なしに宗教だけ發達させようとしても、それは根無し草の空頼みに過ぎない。ゲートは人間が最も宗教的である時に最も多産的で藝術的であると言つたが、反對に吾々は、人間が藝術である時に最も多産的で宗教的であると言ひ得る。現に藝術の榮えない國には宗教も榮えない。大なる藝術を有つた國だけが大なる宗教を有つてゐる。今日の宗教家が藝術的地盤を閑却して、單に宗教の發達だけ圖らうとするは、餘りに愚かしい業ではないか。

更に進んで廣く學術の上に及ぼす藝術の影響を考へて見る。學術と藝術とは、互



に全く本領を異にするもので、其の間に何等密接な関係は無いやうに考へられるが、實際は藝術が暗々裡に深い影響を學術に及ぼしてゐる。先づ諸科學が發達しなかつた古代に於ては、藝術的直觀が常識と並んで諸科學の代理をつとめてゐた。づゝと古い時代に於ては、藝術は唯一の學術の代理であつた。分析的智識が發達するには、其の根抵に先づ豊富な具體的知識がなければならぬ。故に藝術の直觀的兼具體的知識なしに、突然分析的科學が發達するといふことは考へられない。ミソロジの土臺なしに、ゆきなり諸科學の發達は有り得ない。故に此の點から觀れば、藝術は科學の土臺であり地盤であつたとも想像される。藝術なしに果たして科學が發達し得たであらうか。ギリシヤ文明の發達を見れば、此の事實はますます明白である。

不圖考へると、藝術の發達は學術の進歩に何等の關係も無いやうに思はれるが、實際兩者の關係は極めて密接である。藝術は全的に靈活に天地人生を直觀することであるから、藝術的直觀が豊富であればあるほど、天地人生に關する科學的知識の地盤や根抵やが豊富であり確實である所以である。ギリシヤの學術が、精確にはミ

ソロジやコスモゴニを地盤として發達したものであるは、既に廣く知られた著名な事實である。藝術は取分け人生に關する直觀であるから、嚴格に謂ふ人生に關する學術——人間生活に關する學術は、格段な意味に於て藝術を地盤とし前提とすると言はなければならぬ。こゝに藝術と哲學との密接な關係が有る。ギリシヤの如く藝術的根據が強かつた處には哲學も榮え、ローマの如く此の根據が薄弱であつた處には哲學も發達しなかつた。現に今日に於ても、哲學は藝術と同じく直觀に賴るべきでないかとさへ主張される。藝術といふ地盤を取去つては、哲學は甚しく見すばらしくなると同じ意味で、藝術的直觀に豊かでない者が、果たして完全な意味に於て哲學者と云へるであらうか。自然科學上の發見さへも、科學的知識よりは、寧ろ直觀的知識に基づくと言はれるではないか。藝術なしには到底人間に關する完全な學術は發達しない。

嘗にこれのみではない。藝術は最も隱微な影響を學術に與へなければ已まない。個人に特殊なテムペラメントが廣く知識作用に隱微な影響を與へると同じく、特殊



な藝術的傾向は、必ず其の影響を知識作用に及ぼさざるを得ない。デリケートな精緻な藝術活動を備へたギリシヤ人は、同じくデリケートな精緻な科學的知識を遣り出し、これに反して、神韻漂渺たる藝術的直觀を備へた東洋支那民族は、同じく直觀的にして深奥な趣を備へた學術を後世に残したではないか。嚴格な意味に於て謂ふテオーストは、單に知識作用のみならず、廣く他の精神活動に極めて隱微な而も顯著な影響を及ぼさなければ已まない。此の意味に於ても藝術は他の文化の地盤であり根抵であると言はなければならぬ。

## 第五

藝術活動が他の文化に及ぼす影響に就いては、尙茲に記述し説明しなければならぬ。數多の事柄が有る。けれども最早前段の解釋だけで可なり長きに涉つたから、最後に藝術が他の文化に及ぼす共通な影響といふ一點だけ簡單に附記することとする。共通的な影響とは外でもない。藝術活動の生命は飽まで創造に存するから、現

在の狀態に満足せず、常に新らしいもの一層よりよいものを追求して已まないといふは、藝術的傾向が廣く他の文化に及ぼす隱微にしても而も最も顯著な影響である。すべての創造は、直接間接に藝術活動に因るものであるから、人生に於ける總ての進歩は直接間接に藝術的傾向に基づくと言つても決して溢言でない。藝術なしに果たして人生に進歩が有るであらうか。頗る疑はしく考へられる。

(大正一〇年二月)



# 新時代と文藝

## 第一

文藝が社會改造の水先案内たる任務を盡し得るや否やを論ずるよりも、手取早くどうすれば文藝がさうした任務を果たすことが出来るかを考へた方がましであらう。けれども其の「どうすれば」といふ問題を取扱ふためには、先づ順序として第一問題——文藝が果たして改造の水先案内者たる資格を有つてゐるや否やを、簡単に檢べて置く必要が有る。

文藝の本質から言へば、實際的な社會改造といふことは、必ずしも其の直接の目的でない。譬へば、人生に關する教訓が、必ずしも文藝當面の任務でないと同じである。けれども人生に關しては、文藝が他の何ものよりも多くを教へると同じく、社會改造に關しても、假令實際的な具體的な方法は教へないまでも、改造の根本的な精神

と意氣とを鼓吹する點に至つては、恐らく文藝は他の何ものよりも優れた力を有つてゐる。私は先づ此の點だけ明らかにしたい。觀かたによつては、文藝は時勢を率ゐるといふよりも、寧ろ時勢に率ゐられるもの、時代の反映が文藝で、必ずしも其の先導者でないとも考へられる。言ひ換へれば、時代が文藝を産み出すのであつて、文藝が時代を産み出すのでないから、文藝は時代を代表すると言へるが、必ずしも新しい時代を造るものでないとも考へられる。成るほど時代の反映が文藝であり、文藝が時代によつて産み出されるものであることは、最初から明白な事實であつて、勿論我々は此の事實を否定することは出来ない。否定どころか、我々は十分此の事實を認めなければならぬ。時勢や時代を根據とし地盤として産まれない文藝といふことは考へられない。けれども一步進んで考へれば、此の事實は必ずしも文藝が新時代を造るといふことを否定するものでない。時代によつて産み出されて、更に進んで時代を造るといふが、寧ろ文藝本來の面目であり本領である。一定の時代精神を背景として産まれ出でながら、尙其の時代精神の中から新らしい特殊な傾向や風潮



やを造つて行くが文藝の本來である。或は當の時代精神をますます強め深めることも有らう、或は其の中から特殊な傾向を産み出すことも有らう、或はこれに種々な改造刷新を促すことも有らう、更に或は己れを産み出してくれたとは全く反対と思はれるやうな新時代を産み出すかも知れない。さまざまの意味に於て、文藝が時代刷新又は改造の根本精神に關與する——關與するといふより寧ろそれを本來特殊の面目としてゐることは、理論よりも何よりも先づ事實が明らかに之れを證明してゐる。最も著しい事實だけ取つて考へても、例へばヘルダー、ゲーテ、シレル等の理想派文藝は、果たして新時代の先導となり案内者とならなかつたか。ヘルダーがヒウマニズムは、其の當代に貴く高い一種の氣運を造らなかつたか。ゲーテが『ゼルテル』や『ファウスト』や『ウキルヘルム、マイスター』は、最も顯著な最も特殊な而して或意味に於て最も優秀な傾向や時代やを造らなかつたと言へるであらうか。同じ意味に於て、シレルの『ロイバー』や『ウイルヘルム、テル』や、理想派の意味に於ける最も高貴な『自由』の精神と意氣とを新たに造り出さなかつたであらうか。最も

手近な例を取つて言へば、トルストイの文藝や思想やは、果たして新時代の構成に最も深刻にして且最も微妙な影響を與へなかつたであらうか。現に我國の文壇や思想界にさへも彼れの影響は最も顯著に且最も深刻ではないか。人道主義的な世界主義的な社會主義的な且キリスト教的な思想傾向は、トルストイの文藝を通じて、最も廣く世界的に宣傳され布教されたではないか。今日の新時勢は、無論世界的協同のもとに造り出されたものであるが、其の中にトルストイの力に歸せられる部分は可なり甚大であることを認めざるを得ない。彼れは確に今日の新時代を産み出した最も大なる一人であつたと言へる。

「文藝の生命は創造である。種々な意味に於ける新らしい精神や傾向やを創造するところに文藝の生命が有つて、斯やうな創造の特性を引去つては、文藝に何程の價値も無い。舊時代や舊精神やを破壊して、新らしい活潑な生活のガイスタを切りひらいて行くところに文藝の價値が有る。たゞ時代精神に引きづられるだけで、積極的に時代精神を率ゐることが出来ない文藝は、文藝の名あつて、實は文藝の面目を



發揮し得ない低級な文字に過ぎない。殊に今日のやうな世界大動搖——すべてが根本的に新らしく造り出されなければならぬ時代にて、文化の向かふべき大方針を最も具體的に最も鮮明に且最も活き々々と示すものは、孰れの方面から觀ても先づ文藝でなければならぬ。實際的の直接な施設は文藝の能事でない。新文化の向かふべき最も根本的な方向及び精神は、ひとへに文藝や哲學やによつて暗示されなければならぬ。そして斯やうな改造の根本的精神はどこまでも文藝家や哲學者やの天才によつて、現代の動搖の根柢から發見され創造される新精神でなければならぬ。こゝにこそ今日の文藝家の努力と理想とが存する所以で、此の理想に向かつて邁進しない文藝家は、所詮時代から取殘される落伍者の群に過ぎない。

## 第二

將來の文藝が如何なる方針を取つて進むであらうか。當來の文藝の進路は如何。斯やうな傍觀的な豫言者めいた疑問を發するよりは、端的に文藝の將來を如何にす

べきかを決めるが今日の急務である。時勢はいよ／＼切迫してきた。今日は最早や文藝がどう成るであらうかを尋ねる時ではなくして、直に今日の文藝は如何にされれば宜いかを決すべき時である。又實際どう成るであらうではなく、文藝家の積極的な努力によつて、如何やうにでも將來の文藝は決まつて行くに違ひない。斯やうな意味に於て、私はこゝで簡單に來たるべき新時代と文藝との關係を考察して見たい。來たるべき新時代といふことは、問題が餘り大きすぎて、簡單には取扱はれにくい。けれども改造又改造は今日の中心傾向である。改造の根本精神は何であつて、何を目的として社會改造は行はれねばならぬか。せめてこれだけの事さへも明瞭ならでは、何のために改造を叫び、何のために社會改造を要するか、甚しく不徹底である。此の場合に於ても、我々は將來の社會生活はどう成り行くであらうかと尋ねず、端的に將來の社會生活は如何にさるべきかを決めなければならぬ。將來の社會生活——正しくは今日まだ無意識的に人心の奥に潜んでゐる理想は、まだどこまでも隠れた理想であり傾向であつて、いつそれが事實の上に實現されるか、今の



ところ全く不明である。けれども將來いつかは是非とも實現されなければならない理想又は要素が、殆ど無意識的に今日の人心の奥に作用してゐることは、殆ど疑ふべからざる事實のやうに考へられる。私はこゝで此の要求又は理想を明確に説明することは出来ない。けれどもそれが大體如何なる種類のものであるかは、今日の人にはおのづから認識され會得されてゐる。

十九世紀が特に産業主義の時代であつたことは、今更説明するまでもない。來たるべき廿世紀も、いつまでも此の産業主義一方で時代が推し進むであらうか。勿論産業の發達や、商工業の進歩やは、今日及び今後の人類生活には必然缺くべからざる要件であつて、此の方面の文明の進歩なしには、將來の社會生活は到底考へられな。けれども産業的生活が果たして人類生活の全體であらうか。人類生活は産業生活一方で果たして満足されるであらうか。そこに特に文藝家や哲學者やが懐いてゐる大なる問題が有る。十九世紀は、其の最初の理想主義的文明を除いて、大體に於て産業主義一邊の時代であつた。物質生活の擴充がどこまでも十九世紀文明の主なる

傾向であつた。ラッセルの言葉を借りて言へば、主として所有慾の一方だけが満足されて（又は満足されずして）創造慾が殆ど全く壓抑され中絶されたが十九世紀文明の特徴であつた。人心は偏へに所有慾を満たすべき手段——金錢財寶といふ一方面のみに向かつて突進した。十九世紀に於て、人心の中心的要求となつたものは、理想でもなく神でもなくして、主としてマモンの神——金錢であつた。殊に今日の人によつて十分深く會得されなければならない事は、十九世紀は自然力——自然の機械的な力が殆ど全く人間の力を壓迫して、人類の自由は自然のために奪ひ去られたことと是れである。自然科学が哲學の全野を僭し、實證主義的風潮は人心全體を支配し、各種の機械と技術とは精神活動の總體を支配した。すべてが自然科学化され自然化され機械化されて、人間特殊の自由は殆ど無くなつてしまつた。知識——機械化された知識が精神活動の主要部を占めて、感情や意思の力は殆ど全く度外視された。世間は擧げて乾燥無味な主智主義——淺薄浮薄なラシオナリズムに支配されるに至つた。人心は著しく冷かにつめたく成つてきた。



文藝上に於ては、あらゆる意味のリアリズムが全體を支配した。否、十九世紀の後半期に於ては、自然主義がすべての文藝の基調であつた。冷かな理智的な機械的な觀察や實驗やが、文藝全體を支配した傾向であり精神であつた。

二十世紀は、果たして十九世紀の舊文明を其のまま進めて行くものであらうか。今日世界に瀰漫してゐる改造の大機運は、單に舊文明を修復して、此れを二十世紀の將來まで推し進めようとする試みに過ぎぬであらうか。人心は十九世紀の産業的文明に何時までも満足してゐるであらうか。前代文明に對する深い深い不満が今日半無意識的に人心を支配してゐないであらうか。今日の世界的動搖は、鋭敏な直觀力によつて觀察すれば、十八世紀來十九世紀來人心を支配した偏産業主義偏理智主義に對する不安不満がつもりつたもので、此の強烈な壓迫から遁れて、本來の人間性の自由を味はひたいといふ憧憬苦悶が其の大部分を占めてゐないであらうか。隨つて最近の世界的大戦争は、言葉どほり十九世紀文明の總勘定を執行せしむべき大なる暗示ではなかつたか。既に十九世紀末に於ては、十九世紀文明に對する不安不満の

傾向が著しかつた。世紀末文藝はすべて此の不满懊惱の聲であつたとも觀られる。社會主義的精神や各種の社會政策や、ことごとく物質的壓迫から民衆を救はんとする方法であり努力であると觀られる。

斯やうな意味に於て、來たるべき二十世紀に於ては、どうしても十九世紀文明に代へらるべき新文明が造り出されなければならぬ。産業的文明や自然科学的文明を否定する意味ではないが、少なくとも産業主義一邊に偏せない新文明、産業主義を單に生活の土臺とするやうな超産業主義の文明——即ち人間性の自由が發揮されるやうな新文明が如何なる方法によつても造り出されなければならぬ。そこに改造の眞義が有り、そこに生活刷新の眞の精神が起こつてくる。

故に當來の新文藝は——私は敢て新文藝といふ、新文藝でなければ世界改造の大事業に關與する権利が無い、さういふ意味の將來の新文藝は——當然將來の新文明を暗示し豫想し創造するたぐひのものでなければならぬ。新文明は今や世界民心の眞摯な要求であり理想であると同じく、新文藝は同じく世界民心の必然的な要求で



あり理想でなければならぬ。當來の新文明の根本精神を豫想し創造するものが將來の新文藝——否今日の新文藝でなければならぬ。随つてまた將來の新文藝は、前代の自然主義的文藝とは、甚しく面目を異にするものでなければならぬ。自然主義的文藝は、假に人間の自由性が自然力に壓迫されたさまを寫し出したものであるとすれば、勿論此の自然力又は必然力をも十分に認めながら、尙此の自然力をしかと脚下にふまへて、人間の自由性がさまざまの徑路を取つて發露し伸展するさまを畫き出すが、新文藝の眼目でなければならぬ。十九世紀末文藝は、既に十分此の方面に向かつての貴い暗示を與へた。トルストイの思想や文藝やは、其の最も大なる適例であつた。故に觀かたによつては、新文藝は、自然主義的よりも、寧ろ新理想主義的——新理想主義的といふ言葉に語弊が有らば或は新人道主義的とも、或は新人間主義的とも呼ばれるであらう。文藝の範圍を人間性の一面に限らず、全體としての人間性の發露を目的とするところに、新文藝の特徴がなければならぬ。たゞし今日は尙人間性が種々の機械的束縛や自然やからの壓迫に苦んでゐる時代である。

如何にせば此等の束縛や壓迫から自己を解放することが出来るか。これが今日當面の問題である。故に今後の新文藝とても、當分の間は尙斯かる束縛からの解放に惱殺されて、自由への苦悶や憧憬やを主なる傾向となすであらう。將來の文藝が一足飛びに直に新人間主義に轉歩しようとも思はれない。けれども世界の文藝は何時かはどうあつても此の方面へ向かつて進まなければならぬ。然らずんば、人間性は自然のために虐げられて、遂に其の本性を失つてしまふかも知れない。人間性の發露のためには、どうしても茲に謂ふ新生面が開かれなければならぬ。

今日の世界の動搖は、たゞ動搖のための動搖ではなく、民衆を物質的必然的機械的束縛から救済して、彼等をしてひとへに貴い文化の光に浴せしめんとするものであるとすれば、今日の動搖の行手は、單に束縛や壓迫やからの解放に止まるべきにあらず、進んで全體としての人間性の完全な發達を圖るが、一切の努力の目的であり理想でなければならぬ。新文藝が開拓すべき領野は殆ど無涯限に廣がつてゐる。これまでの理智一邊に偏した文藝は、例へば人性の限りない柔かみや深みや暖かみ



や強みや勇ましさなどの方面は、十分に之を経験することも創造することも出来なかつた。理智殊に自然科学的理智は、餘りに淺薄であり皮想的であり表面的であつた。嚴格な意味の深さといふことは、どうしてもこれまでの文藝では十分に發揮されなかつた。虐げられた人生の惱みといふことが、これまでの文藝が示した唯一の深みに外ならない。將來の文藝は、全體としての人間性が必然性に打勝つて、人間が人間らしく、本然の人間にたち返つて、あらゆる人間性が富贍に自由に複雑に而も或は優さしく或は暖かに或は深刻に或は勇壯に、各方面にわたつて自由に發露し伸展するさまを自在に經驗し創造しなければならぬ。文藝家は先づ率先して親しく人間性の自由な開發を十分富贍に十分深刻に經驗しなければならぬ。彼等があらゆる意味の改造運動に與つて其の水先案内を務める所以は、先づ彼等が普通民衆に先だつて、夙に自由への憧憬と解放の苦悶とを味はひ、更に進んで複雑な人間性を廣く深く細かに強く身みづから經驗し翫味し觀照するがために外ならない。普通民衆より一步を先んじて、而も民衆の向かふべき進路をさり開いて行くところに文藝

家の天職が有る。我々は文藝家の此の天職に對照して、今日の文藝家のみすぼらしさをつくづく感ぜざるを得ない。將來の文藝家は、此の意味に於て、どうあつても先陣を承はる雄々しい勇士でなければならぬ。纖弱や怯懦やは、如何なる方面か觀ても、將來の文藝家の資格でない。(大正一〇年一月)



# 民衆主義と天才

## 第一

今日の民衆的傾向と古來の文化的傾向就中理想主義的傾向との間には、容易に一致しがたい精神や理想やが可なり澤山有るやうに感ぜられる。就中民衆主義の根本とも見られる平等主義と、理想主義の精神とも見られる差別主義との間には、結局に於ては兎もかく、一見したところでは、到底完全な一致が見出だされぬやうに感ぜられる。

民衆的精神は、どこまでも人類の平等を主張して已まない。平等を主張するといふよりも、少數特權階級や少數知識階級をば、どこまでも多數民衆の水平線まで引きさげて、すべてを同じレベルに平均し民衆化しようとするが、民衆主義——少なくとも今日までの民衆主義の傾向であつた。今日實際に民衆主義を主張する人々は、

大抵事物の特殊とか、生活の特權とか有らゆる意味の階級又は區別とかを排斥して、出来るだけすべてが同等であり同列であり一様であることを主張する。デモクラシイとは一切の平等主義とも解釋される。而して民衆主義は直に平凡主義又は平民主義とも考へられるから、特權や差別を主張する意味に於ける英雄主義や貴族主義や天才主義やは、さながら民衆主義の根本精神を破壊するもののやうに考へられてゐる。如何なる意味に於ても特殊といふことは、直にデモクラシーの破壊であるやうに考へられてゐる。

反之古來の理想主義は、大抵種々な意味の特殊主義や差別主義や英雄主義や天才主義やを主張した。理想主義といふ言葉が、それ／＼特殊な理想を主眼とするものであるから、理想は即ち平凡ならざる特殊精神の意味とも解釋される。現に十九世紀最初の理想主義は、大抵天才主義又は英雄主義の主張であつて、天才主義又は英雄主義が理想主義の本體であつたとも言へる。フイヒテの自我哲學は、自我といふ道德的天才の活動を主張したもので、道德的天才の活動が眞の文化の向上と考へられた。



シュレーゲルのロマンチズムは、藝術的天才の活動そのものであつて、斯かる天才のみが能く民衆を藝術化することが出来ると主張された。

此の外カーライルの英雄主義は、文化の進歩は偏へに少數天才の力に頼ると説いたこと、又ニイチエが平等主義の強敵であつて、極端に少數天才主義を主張したことは、廣く世間に知られた事實である。就中ニイチエが民衆主義凡俗主義に對する熱烈な反抗は、今日の民衆時代に於ては、特に注意するべき事實である。

斯やうに民衆主義と理想主義との間には、各の根本的精神に於て、互に調和しがたい傾向が有るやうに觀察されるが、而してまた普通にはさやうに考へられてゐるが、斯やうな普通の觀察が果して正常なものであらうか。兩者は到底一致し調和しない本質を備へてゐるものであらうか。こゝで簡単に此の主要點だけ考へて見たい。

## 第二

先づ私自身の意見を最初から明白にして置く必要がある。民衆主義の平等的精神

と、理想主義の差別的又は特殊的精神とは、一見相反する矛盾した傾向のやうに考へられるが、それは兩者が互に相偏した極端な立脚地を固執するからで、公平に且精確に言へば、此の兩傾向は、寧ろ互に相補翼し調和さるべきもの、互に補翼し調和されて、初めて兩者は完全な働きを遂げるものに外ならない。互に偏頗な立脚地を固守するとは、先づ民衆主義の方面から言へば、多數の主張者は、これまで主として經濟生活に着眼して、一層廣い意味の文化生活をば、甚しく漠然としか考へなかつた。換言すれば、これまでの民衆主義者は、廣く文化的に人類生活を考察したといふよりは、或は主として經濟的にか、或は單に一局面のみから之れを觀察した者が多い。人類としての最低最小の存在を維持する權利、或は一層之れを廣げて經濟生活を全くする權利といふ方面から觀れば、人類はすべて平等であつて、其の間に本質的に何等不平等であるべき理由が無い。或は又一層廣く生活の權利——人間と生まれたからには、すべてが生存の權利を所有してゐるといふ一局面のみから觀れば、矢張人類はすべて平等であつて、一人と雖も斯かる權利の無い者は無い筈であ



る。然るに文化生活といふ方面から観察すれば、人類は明白に不平等であり差別的であつて、決して平等であるとは言はれない。文化生活は價值生活——即ち人格價值生活を意味する。價值は等差を意味するから、等差を没した價值は無意味である。才幹の優劣に於て、感情の高貴なると粗野なることに於て、意力の強弱に於て、十人十色、千人千色、一人も同じ者が無いといふが價值生活の本質である。此の差別的な等差的な價值生活を否定することは、人間生活そのものを否定すると同じである。ニイチエが人と人との間の巨離のベーツスを嘆じたことには深い意味が有る。從來の民衆主義者は、文化生活に於ける此の差別的方面をば精確に観察せず、單に生存の權利といふ一面のみから平等を主張した者が多い。比較的相對的な平等觀をば、直に絶對的な平等觀に推しすゝめたが根本の誤謬であつた。倒に理想主義者は、價值生活に於ける差別——就中少數特殊の價值——にのみ注意して、一般生存の權利といふ方面からの平等には深い注意を拂はなかつた。彼等は主として道德上の貴族主義や、少數天才主義やに着眼して、多數民衆の生活に就いては何等特別

な注意を拂はなかつた。故に民衆主義者が差別的な價值生活に注意する必要が有ると同じく、理想主義者は反對に生存權利の平等的意義に注意する必要があると言へる。

### 第三

斯くして民衆主義者の平等主義も、又理想主義者の差別主義も、それみづからに於ては眞理であつて何等非難さるべきものでない。たゞ各々其の主義を固執して、兩者の調和を計らないため、そこから由由しい誤解が起こつてくる。我々は今後の民衆的精神の進歩のため、十分此の點を明らかにして置かなければならぬ。蓋し今日までの民衆主義は、前代の理想主義に對する反抗性を備へてゐた爲め、出来るかぎり事物を文化的に又は價值的に觀ることを避けて、單に平等的方面のみから之を觀察しようとした。然かも時勢は次第に進んできた。今日の進歩した民衆主義は、最早斯かる偏頗なものではなく、進んで文化的見地を自己の立脚地として、此の正



當な立脚地から總てを批判し且實現しようとして力めてゐる。故に例へば、ヨーロッパの新社會主義といふやうな見地に立つてゐる進歩した民衆主義者は、現實の社會組織に關してさへ、明白に差別主義に頼らなければならぬと主張してゐる。即ち彼等は次のやうに言つてゐる。絶對的平等といふことは、今日から振返へつて見れば、極めて幼稚な過去の夢に過ぎない。無差別無組織無秩序無系統が、どうして社會生活を治めて行くことが出来やうぞ。絶對的平等は無秩序を意味し混沌を意味する。混沌や無秩序やが人類生活を整頓し得る謂はれが無い。差別雜多の中に平等が有り統一が有つて、そこに初めて眞の統一や平等やが成立するのであるから、社會組織そのものから先づ差別的等級的でないならぬ。勞働や才能やの種類及び優劣によつて、それ／＼分業や系統やが立てられるべきであるから、例へば官吏社會、醫者社會、技術師社會、學者社會、農民社會、工藝者社會といふが如く、それ／＼特殊な階級が存し、又同一社會に於ても、それ／＼高低優劣の區別及び階級が存立しなければならぬ。又それ／＼の社會に、それ／＼優劣高低の等級的階級が有

るとすれば、廣く社會又は國家から酬ひられるところにも亦おのづから等級的階級が無くてはならない。勞力の等差と報酬と一致して、初めてそこに正義と公平とが實現されるのであると。

我々は此の點をば、一層哲學的に一層文化的に考へなければならぬ。將來の進歩した民衆主義は、今日のやうな反抗的な偏頗な態度を捨て、須べからく眞の文化的新精神の上に立脚しなければならぬ。すべての事物を主として文化的に觀察することが、將來の新民衆主義の精神でなければならぬ。文化的に事物を觀察することは、今日までの如く、事物の批判の尺度が、單に物資とか金錢とかではなく、主として精神力又は人格價值そのものであることを意味する。我々は今日まで總ての事物を餘り物質的に金錢的に經濟的に量り過ぎた習慣を有つてゐる。一切の事物が人格價值に従つて批判されるといふことは、其の事みづからが非常な努力を要する將來の理想であつて、斯かる理想は今日直に實現されやうとも思はれない。然しながら、將來の民衆主義は飽まで此の理想を追つて進まなければならぬ。眞の文化的地



盤に立脚しないかぎり、民衆主義はたゞ凡俗主義又は衆愚主義又は物質主義であつて、斯くの如き主義傾向が能く將來の人心を收め得ようとは考へられない。非文化的な民衆主義は、結局混沌無秩序を極めた野獸主義に外ならない。故に民衆主義が民衆主義として立たうとするには、是非ともそれが文化的地盤の上に立つた新民衆主義でなければならぬ。文化的地盤の上に立つて、民衆主義は初めて完全に人間の本性に立脚することが出来る。

文化的地盤に立脚した結果、民衆主義は如何なる様式を取るかといふに、それは結局民衆主義と眞の理想主義との抱合調和でなければならぬ。人格價值を標準として、すべてが價值的に等級的に差別的に判断されるといふが、新民衆主義の精神でなければならぬ。單に有形的な社會組織のみならず、すべて無形な現象までが、主として價值的又は等級的に批判され且組織されなければならぬ。社會の生活の秩序は、斯くしてのみ初めて完全に成立するのである。

斯やうに觀察してみると、彼のスチュアート・ミルやイブセンたちが非常に苦んだ

問題——多數民衆と少數天才との關係問題は、少なくとも理論的には全く解釋し得られない問題でなくなつてくる。即ち民衆生活は、たゞ一團の衆愚の生活ではなく、價值等級によつて秩序つけられ組織だてられた社會であるから、精神的に又は人格的に優秀な者は、おのづから一層劣等な他の民衆を指導し統率すべきは自然の順序である。優秀ならざる者が優秀な者に指導され統率されることは、決して眞の自由を損するものでなく、寧ろ最も廣く且最も高い意味に於て、それは完全な社會教育の自然の様式であると判断されなければならぬ。斯やうにしてニイチエが天才を地の鹽であり人生の目であると極言したことは、必ずしも民衆主義と相容れないことではなく、民衆主義は寧ろニイチエを取入れて、初めて完全な生命を得るものであることが知れる。何となれば、ニイチエやカーライルが主張したとほり、社會と人生とに新らしい意義を加へて、特別な時代と歴史とを造り出すものは、多數の民衆ではなくして、常に少數の天才である。天才は勿論民衆を背景とし地盤として産まれるには相違ないが、更に新らしい意味と價值とを時代と民衆とに與へる者は、依然と



して少數天才である。現に民衆運動そのものさへも、知識階級によつて喚び醒まされ且指導されたもので、決して文字通りプロレタリアの中から起こつたものでない。民衆の中から直接に起こらずとも、能く民衆の傾向を代表したものであれば、それがよし少數者によつて創められやうとも、民衆的たることに於て少しも障りはない。天才や優秀者や、畢竟民衆の列の先頭に立つてゐる者に外ならない。

然るに普通にデモクラチックと言へば、成るべく優秀者や天才やを排斥される。卓越した個人とか英雄とかいふたぐひの者は、將來に於ては最早無用有害であるやうに考へられる。つまり吾々は今日まで餘りに物的な又は外形的な價值批判を行ひ來たつた爲め、此の標準によつて定められた優秀者や強者や富者やをば、我々は最早尊敬することが出来なく成つたのである。けれども文化的地盤の上に立つた民衆的精神から言へば、卓越した個人とか、優秀者とか、先覺者とかは、主として人格價値を標準として値ぶみされ價值づけられたもので、或は道德的に或は宗教的に或は政治的に或は學術的に優秀な者に外ならない。社會生活は、必然的に斯やうな優秀、

者や卓越者によつて階級づけられ組織づけられなければならぬことは、例へば斯やうな秩序や組織やが缺けてゐる混沌たる社會を想像すれば、おのづから明白である。それらの社會生活がそれらの適任者や優秀者によつて秩序づけられないとすれば、斯かる社會に生存する者は、すべて人格的に優秀な者を尊敬することを知らないわけで、人格價値を無差別に絶對平等と観ずる者に外ならない。斯くの如き社會に於ては、人格價値の等級が全く考へられない。他人格の尊敬とか、優秀者に對する尊崇とかいふやうなものは全く無くなつてしまふ。價値の優劣に盲目であれば、一層優秀な價値を追求し憧憬することも無くなつてくる筈である。デモクラシーを穿きちがへて絶對平等と心得る者は、すべて斯やうな誤れる價値批判（又は無批判）に陥る者に外ならない。斯かる無批判的社會は、社會といふよりは、寧ろ混沌無秩序を極めた衆愚の地であつて、斯かる社會がデモクラチックと呼ばれるならば、世にデモクラチックほど野蠻な無秩序なものはない。斯かる野蠻な無秩序な社會がどうして將來の理想的社會と成り得よう。







完全に十分には一般に理解されない特質を有つてゐる。殊に藝術や哲學やは、之れを翫味し會得する者の平生の素養如何によつて、さまざまの程度に翫味され會得されるものであるから、比較的高級な藝術は十分深く且精しくは一般に理解されがたい性質を有つてゐる。名匠の手に成つた繪畫は、一と通りの意味に於ては何人にも理解されようが、其の中に包まれてゐる深く高い意味は、恐らく少數の素養深い者にしか理解されぬであらう。斯やうにして藝術や文藝やには本質的な價值等級が備はり、又これを翫味し賞翫する方面から觀ても、そこに同じく無限の等差が有り階段が存することは、孰れの方面から觀ても到底拒むべからざる事實である。

尤も民衆藝術といふことをば、極めて卑近に且狭く解釋して、廣く一般民衆に分其の意味乃至精神が理解されるべきものとすれば、斯やうな民衆藝術が今後に於てますます必要であり且次第に發達すべきは今更言ふまでもない。けれども斯やうな意味の民衆藝術は、普遍的ではあり平等的ではあるが、價值的等級的に言へば、決して高級なもの優秀なものとは言はれない。例へば講談物や探偵物やが高級藝術と

見られないことでも、此の事實は明白である。されば所謂民衆藝術は、決して單に此の種類の低級な藝術のみに限られてはならない。一層高級な藝術が絶えず廣く民衆を指導し感化するにあらざれば、民衆藝術の進歩は到底期せられない。藝術の方面に於ても、進歩が無ければ必ず退歩が有る。單に低級な藝術のみに養はれば、一般藝術活動はますます低級に傾かざるを得ない。我々は此の方面に於ても、差別を含まない絶對的平等は、畢竟混沌無意義であることを認めざるを得ない。

されば藝術的天才は、其の作品によつて、絶えず民衆を高い趣味に導かなければならぬ。天才の手に成つた立派な作品によつてのみ、民衆は高い方へと次第に導かれる。従つて卓越した藝術家を缺くことは、藝術方面隨つて廣く文化方面に於けるアナキー又は混沌状態を意味する。優秀な藝術家に指導され統一されてのみ、一般藝術活動には秩序が有り等級が有り又進歩が有る所以で、斯やうな秩序や等級やが無いところには、唯アナキー有るのみである。一般民衆が優秀な藝術家によつて指導され統一されることは、決して民衆に取つての屈辱でもなければ、又彼等の自



由が妨げられることでもない。屈辱とか壓迫とかは、暴力が自由を妨げる場合のことで、人格價值の上に於て、優秀ならざる者が優秀者を尊崇することは、決して斯やうな屈辱や壓迫やを意味しない。斯かる場合の尊崇や歸依やは、寧ろ理想的な自由社會に行はれる人と人との親和、又は最も廣い意味に於ける教育的傾向に外ならない。文化の向上發展はひとり斯やうな親和又は教育によつてのみ可能である。

且また藝術的天才が現はれて、一般藝術活動を指導することは、決して民衆藝術の精神に戻るものでない。天才の手によつて作る藝術品が如何ばかり高級なものであつても、天才者その人が民衆の一人であり、然かも民衆生活を背景又は地盤として産まれた者であるかぎり、彼れの手によつて成る作品は、當然民衆生活に關したものでなければならぬ。つまり天才は、民衆から全く孤立した者でなく、寧ろ民衆を代表して、民衆の先頭に立つて、それを統率してゐる者に外ならない。随つて彼れの手によつて成る藝術品も、實は民衆藝術を代表するもので、其の全體の先頭に立つて、全體を統率し支配するものに外ならない。故に藝術的天才の出現は、決して民

衆藝術の精神に背くものでなく、寧ろ民衆藝術は、ひとへに天才の出現のみによつて進歩し發達する。藝術的天才なしには、民衆藝術の發達は到底望まれない。

誤れるデモクラシーの思想は、藝術界や文藝界まで侵入して、たゞ平凡無意味な作のみが、さながら民衆的であるやうに感ぜられ、天才といふやうなことは、最早過去の夢とばかり考へられてゐる。斯やうな似而非デモクラシーが、即ち今日のやうな平凡無意味な文藝界を造り出したとも言へる。進歩したデモクラシー、又は眞のデモクラシーは、いつまでも斯かる幼稚な思想に囚へられず、進んで理想主義が提出した天才主義を取入れなければ已まない。今日の我文壇は、深く此の點を考へなければならぬ。(大正一〇年一月)



# 教育の根本義としての文藝

## 第一

近頃教育界並びに議政壇に於ける一二の出来事が動機となつて、再び教育對文藝の問題が喧しく成つてきた。教育者側から此の問題を取扱ふ者も有れば、文藝者側からもさまざまの意見が提出されてゐる。文藝對教育の問題は、譬へば文藝對道德の問題のやうに、幾たび繰返へされても決して無益でない重大問題のやうに考へられる。教育と文藝との關係が、斯くして明らかにされることは、固より願はしいことであるが、今日廣く世間に行はれてゐる意見なり主張なりは、果たして教育上並びに文藝上の兩方面から觀察して、眞に公平無私な見解と言へるであらうか。今日の意見なり主張なりは、果たして文藝と教育との關係をば、眞に公平に明白に闡明し指導するものと言へるであらうか。

私見によれば、不幸今日の爭論は、互に一方が他方を誤解して、いつまでたつても問題の核心に觸れないやうな觀が有る。先づ教育者の方面から言へば、こゝには相變らず文藝に對する無理解や誤解やが跋扈してゐる。勿論多數の教育者殊に若い教育者の中には、固陋な先輩に反抗して、強いて文藝を教育に引入れようとする者も多いやうであるが、教育界の先輩と言はれる者の中には、いつまでも文藝に對して無理解である者が可なりに多數であるらしい。中には教育と文藝との關係に就いて、相當な知識は備へてゐても、まだ十分其の精髓に徹底しない者も多いらしい。そして多數の人々は文藝や藝術やに對して全く無關係であるやうな極めて冷淡な態度を取つてゐる。

又文藝家の方面でも、眞面目に文藝と教育との關係を考へてゐる者は甚だ少ない。固より文藝家當面の職責は、優秀な文藝の創造に存するのであるから、教化即ち教育の方面から文藝を考察する者が少ないは、強ち非難すべきことではない。斯やうな關係から文藝家の方面に於ても、徹底的に精確に教育の根本義を考へてゐる者は



甚だ少ない。中には、文藝は全然教育に無関係であると考へてゐる者も有る。或は關係があるとしても、文藝は寧ろ教育的効果を殺滅するものと考へてゐる人さへ有る。そしてこゝにも一種の無理解が跋扈してゐる。

斯やうに無理解と無理解と接觸し、誤解と誤解と衝突してゐるのであるから、教育と文藝との眞の關係は、今日のまゝでは、いつまでたつても明白になる道理が無い。それも文藝と教育との間にさまで密接な關係が無ければであるが、若し此の兩者の間に極めて重大な關係が有るとすれば、教育家と文藝家との間の相互の無理解は、教育のためにも、文藝のためにも、將た又一國文化のためにも、極めてゆゑしい結果を來たすものと言はなければならぬ。文藝對教育の問題は、單に一時的な又は偶然的な閑問題ではなくして、十分シリアスに取扱はれなければならない一大文化問題である。

然しながら、また翻つて考へれば、教育上に於ける文藝の意義が、我國の精神界又は文化界に於て、幾たびも一種重大な問題として繰返へされることは、廣く文化

の進歩の程度から推して餘りに不甲斐なく又なさない事にも感ぜられる。蓋し苟も立派な文化を備へた國家又は社會に於ては、文藝が教育に極めて深甚な關係を有つてゐる事は、何等曖昧不明瞭な問題ではなくして、最初から分かりきつた自明な事柄であるからである。例へばフランスに於ても、ドイツに於ても、文藝は教育の最も重大な又根本的な要素乃至精神であつて、文藝なしに教育を行ふといふが如きは、全然無意味沒意義な空想とさへも考へられてゐる。試みにルネサンス以來ヨーロッパ全體に普及した教育上のヒウマニズムを想像して見るがよい。ヒウマニズムは、世人が想像するやうに、古典道德主義の教育ではなくして、主として文藝主義の教育ではなかつたか。文藝に因る教育を外にして、教育の眞義は考へられなかつたのである。のみならず、此等諸國に於ける文藝乃至藝術に關する國民の思想は、我國に於ける此等の思想とは甚しく違つてゐる。彼の地に於ける藝術に對する尊崇は、殆ど我國人の豫想以上である。随つて教育といへば、其の根本には必ず文藝が豫想されてゐる。文藝を除外した教育といふが如きは、全くノンセンスとさへも考へら



れてゐる。

斯くして我國に於ける今日の教育對文藝論争は、いづれかと言へば主として文藝に關する無理解又は誤解から起つたもので、此の無理解や誤解やが釋けないかぎり、教育上に於ける文藝の眞義は、いつまでたつても明瞭にされるものでない。古くから我國に普通な文藝に關する誤解——文藝擯斥文藝卑下の傾向は、明治大正の今日に至つても、まだ容易に改まらない。表面は多少其の價值が認められたやうで、事實を言へば、文藝はまだ何となく無駄な餘計な無價値なものと考へられてゐる。斯やうな事情から、教育上に於ける文藝の價值も、今日に至るまで我國民に十分に認められてゐない。今日時代おくれな文藝對教育問題が繰返へされるも、實は己むを得ない必然的結果である。

## 第二

今日まで現はれた文藝對教育論争を見ると、論議や主張やが大かた問題の枝葉に

走つて、眞正面から問題の本義又は根本義にぶつつかつてゐるものは極めて少ない。例へば近代文藝の弊——それも可なり誤解された近代文藝の弊害といふやうな事が指摘されて、それによつて教育に及ぼす文藝の全影響が論争されてゐる。或はまた教育資料としての文藝の適用——然かも可なり間違つた文藝の適用といふ方面から、教育と文藝との關係が論争されたものも有つた。けれども斯やうな枝葉問題が如何ほど鄭寧に繰返へされても、苟も教育と文藝とに關する根本關係が明瞭にされないかぎり、無益な論争は、いつまでたつても止むべしとは思はれない。肝腎の根本問題が其のまゝに放任されてゐては、文藝と教育との眞關係は、遂に明らかにされる時が無い。凡百の枝葉問題よりも、先づ根本的な一義を明らかにするが、今日に於ては何より大切な事ではないか。

若しすべての枝葉問題を離れて、直に根本義に就いて言へば、文藝と教育との關係は普通世間で考へられてゐるよりも極めて親密なものであつて、文藝——少なくとも文藝的精神を除外しては教育は殆ど全く空虚なものと成るとも斷定される。多

教育の根本義としての文藝



數の世間は、或は此の斷定に對して反對であるかも知れない。若しさうであるとすれば、それは明らかに文藝と教育とに關する根本誤解から起つてゐる。文藝に關する誤解は普通一般であるが、教育そのものに關してさへ、世人は一般に時代おくれな舊式な考を有つてゐる。すべてが刷新され改造されなければならない時代に於て、教育のみが依然として舊態を保つて行くべき道理が無い。否、若し改良刷新が今日の形勢であるとするれば、教育の改造は、すべての改造の根本であり淵源でなければならぬ。それも枝葉の改造——たゞ一部制度の改造とか、一部教授法の改造とか——そんな枝葉上の改造は教育上の何等根本的刷新とはならない。今日は教育の根本精神に於て徹底的に改造され施設されなければならない非常な時代である。教育の根本精神に於て一步を誤れば、それが國家の運命にも關係しなければ已まないといふ非常な時勢である。斯かる非常な時勢に於て、根本的に教育と文藝との關係を考察するとき、私は如何にしてもそこにこれまで見落されてゐた重大問題が潜んでゐることに氣附かざるを得ない。新らしい意味に於て、文藝と教育との親密不離な

關係が、今更の如く吾々の目前に迫り來たることを感ぜざるを得ない。

文藝と教育との根本義——斯やうな大問題は、到底こゝで簡單に取扱はるべきものでない。故に殊に今日の改造期に立脚し、在來の日本文化を眼中に置いて、最も手短に教育上に於ける文藝の價值乃至位置を考察すれば、ほゞ次のやうな重大な二三點が指摘される。吾々は此の二三點の中に明らかに教育と文藝との根本關係を觀取することが出来る。

(第一) いづれの方面から觀察しても、活きた人生を最も具體的に活き々と示すものは文藝である。文藝直接の職責が教化に存しないは言ふまでもないが、活人生を示すといふ方面に於て、文藝が最も偉大な教化力を備へてゐることは到底拒まれぬ。今日までの我國の教育は、此の方面に關して文藝を活用する手段をば殆んど全く講じなかつた。今日までの教育は、主として語學と自然科學的知識との發達に關して、活きた人生を教へること——人間學といふ方面は、殆ど全く缺けてゐた。僅に理智的に又は道徳的に人間に關する事柄が斷片的に教へられたとはいへ、それは餘



りに抽象的であつたり断片的であつたりして、活きた具體的な人生は、教育的に又は組織的には殆ど全く教へられなかつた。其の結果我國人は今日まで甚しく不具的な發育を遂げてきた。自然物に關する知識は備へてゐても、肝腎の人間に關する眞知識は有たないといふが、今日までの通弊であつた。よし人間に關する知識は備へてゐても、それは極めて皮相的な表面的な淺薄なものに過ぎなかつた。活きた人生に關する最も深く且根本的な眞智は、今日まで甚しく我國人に缺けてゐた。然り深い々々根本的な人間智がこれまで殆んど全く我國人に缺けてゐた。斯やうな深刻な根本的な知識は、決してたゞの理論や断片的な經驗や科學やによつて與へられるものでなく、それはひとり文藝のみによつて與へられる資格であり特權である。文藝ならでは、此の種の眞知識は到底吾々に與へられない。單に深刻な一面のみならず、また廣く人生の各方面に涉つて、最も廣汎な種々相を活き々々と吾々に與へるものも文藝に外ならない。單に善美な方面のみならず、あらゆる醜惡な方面までも、人生のすべての實相を教へんとするが文藝に外ならない。文藝を措いては、他に廣く且深く人生を教へるものは無いのである。

斯く言はゞ世間は反對するであらう。眞に廣く且深く人生を教へるものは、決して文藝でなくして、ひとり實生活あるのみである。こは一見誤りない眞理のやうに思はれて、實は必ずしもさうでない。實生活が最も切實に人生を教へることは言ふまでもないが、然かも其の教訓は、或は餘り断片的であつたり、或は餘り混亂したものであつたり、或は餘り一局部に限られたものであつたり、或は極めて不徹底で十分發達しないものであつたり、其の外餘り實際的であり過ぎるさまざまの理由によつて、却つて不統一であり、不徹底であり、又餘りに混亂した不完全なものである場合が多い。人生の最も深く且最も微妙な味はひは、却つて文藝によつて、一層統一的に普遍的に徹底的に教へられる。否、實人生に於て統一的に經驗し得られない情味を徹底的に完全に味はせようといふが文藝であつて、此の使命を果たさずしては、それは眞の藝術とは言はれないのである。

故に教育は、最も巧みに文藝を利用すれば、最も具體的に且最も効果深いさまに



人生を學ばせることが出来る。否實人生を最も活き々と教へ得て、初めて教育の効果は全うされるわけで、眞に人生を教へない教育に果たして何程の價値が有らうぞ。如何に廣く外國語に精通し、如何に廣く自然を學んだとて、廣く且深く人生を翫味し得ないかぎり、其の人は完全な意味に於て修養を積んだとは言はれない。

(第二) 單に廣く且深く人生を味はし、せるばかりでなく、人間に眞の意味の教育——嚴密な意味の人格化を與へるものは文藝である。何となれば、文藝は、普通の教課や教材と異なり、直に人格の根柢である感情、情緒、本能、直覺、願望等に訴へる直接行動である。曾てルソーによつて教へられた人格教育——感情教育は、今日殆ど全く閉却されて、再び最も顯著な意味に於ける理智教育が今日の大勢を支配してゐる。あらゆる意味に於ける功利的打算——功利に達せんがための理智の發達が今日の教育の根本となつてゐる。斯かる立脚地から見れば、文藝教育や人文教育ほど迂遠に且無意味にさへも見えるものはない。感情や直覺の教育が、功利と實益とは何の關係も無いではないかとは、今日普通人が懐いてゐる信仰である。けれども翻

つて一層深く教育の根本精神を考へれば、今日の教育の大勢は、甚しく本道をふみはづしたのではないか。勿論今日の科學主義の教育が全然悪いといふのではない。けれども科學主義の教育は須べからく人文主義乃至人格主義の上に立てらるべきもので、決してそれみづからで自立し得るものでない。今日の教育は、餘りに偏科學主義——精確には偏功利主義又は偏理智主義に傾き過ぎてゐる。偏理智主義の教育は、過去の大戦争を機軸として、今日は既に破綻没落の運命に沈淪したではないか。教育の改造といふことは、明らかに此の點からも主張さるべき問題ではないか。ルソーの感情教育——人格教育は、生命を新にして再び今日主張され實現さるべきものと成つたではないか。

教育の斯かる根本義から觀れば、文藝は教育に無關係であるところか、此の根本義を成就させるものは、實に文藝であると判断されなければならぬ。何となれば、文藝は感情の根柢から、ハートの眞底から、人格の奥底から人間を動かし働かせる力を有つてゐる。理智の表面からではなく、情操の根本から、靈魂の眞底から、人



間と活動とを感激させるものが文藝である。適用の方法さへ宜ければ、吾々は文藝によつて若い靈魂を其の根本から感化し養成することが出来る。今日のやうな總てに荒れすさんだ時代に於ては、斯かる教育法はあらゆる方面から觀て、切實に主張され促進され實現さるべきものではなからうか。文藝が人心を文弱に導くなどは、文藝の本質を理解しない者の言である。微妙に繊細に人を導くも文藝であれば、剛毅に強烈にさへ人を導くも文藝である。適用の方法さへ宜しきを得れば、文藝は決して若い靈魂を誤らしめるものでない。

(第三) 文藝の生命は創造であつて、最も適當な方法に於て人間を創造に導くが文藝である。文藝の生命が創造であることに就いては、こゝで細論すべき餘地が無い。或意味で言へば、創造が文藝の本領であることは、餘りに明白な常識論であるとも考へられる。然るに今日までの事實を言へば、創造といふ事は餘り簡単に考へられてゐて、それが必ずしも文藝又は藝術の生命とは考へられなかつた。文藝は創造的なものに相違ないが、創造が其のエッセンスであり本領であるなどは考へられなかつた。

つた。つまり今日まで藝術は、他の社會現象と同じく、強く自然科学的精神に支配されて、客觀的に人生を觀察し會得することに専らであつて、主觀的に新しい人生を造るといふことに極めて冷淡であつた。換言すれば、客觀的に存する人生を觀察し、探求するが、文藝の能事であつて、新しい人生の創造は、必ずしも其の本領でないと考へられた。然るに藝術の本領を一層徹底的に考察すれば、積極的に新しい人生を創造することがどこまでも其の生命であつて、此の意味の創造性を除外しては、藝術はすべて空虚であり無意味であると判断される。藝術は今日まで餘りに自然科学のために虐げられてゐた。今や藝術は再び本來の位置に復歸すべき時に遭遇したと。これが藝術壇に於ける最近の最も新しい叫びである。

文藝の創造性が教育に引入られなければならない理由は頗るシリアスである。教育そのものが元來創造性を尊重すべきものであるは暫く別として、我國文化の特質から推して、創造性の教育は、眞に國運の消長に關する重大問題であるとも判断される。過去の我文化をふり返つて見れば、それは餘りに獨創性と創造性に缺け過



きてゐた。今日までの文化は、餘りに受身的と模倣的に過ぎて、嚴密な意味に於ての創造をば殆んど全く缺いてゐた。そも／＼一國乃至一民族の隆運は、其の國獨得の又は固有の文化を所有することに存する。獨得固有の文化を備へないことは、やがて其の民族が立派な生命を備へてゐないことを意味する。此の意味に於て、創造性といふことは、新しい文化を造り出すべき根本動力と觀られる。創造性やイニシヤチーブやを缺いては、到底立派な文化は産み出されるものでない。

斯かる意味に於て、我教育の根本精神に創造性の發揮といふ一義が加へられることは、日本文化のため將た一般國運のため、極めて重大な事柄である。然るに文藝の生命は創造性であるから、創造性の涵養には文藝の力を借りることが最も自然な方法である。此の點から觀ても、今日までの教育は、餘りに形式的に餘りにオートリタチーブに傾いて、殆ど全く自由やイニシヤチーブやの發揮を度外視してゐた。時勢は漸く變つてきた。今や我國の教育も、最も嚴密な意味に於ける人文主義即ちイニシヤチーブの尊重に進むべき時代に進んできた。

### 第三

斯やうに文藝と教育との根本主義を考察し來たるとき、多數世間は必ず次のやうに反論するであらう。斯くの如き根本主義は、畢竟抽象的な空想であつて、到底事實の上に實現さるべきものでない。小中學を初めとし、すべての教育に文藝を利用せんとする如きは、到底文藝者流の空想に過ぎない。殊に近代文藝の如き、主として人生の暗黒面を教へるものが、如何にして若い靈魂を導くべき指南車となり得やうぞ。文藝は教育を傷つけこそすれ、決して之れを助長し進歩させるものでない。これが殊に我國教育家に普通な意見であるらしい。

斯やうな意見に接するごとに、私は我國文化の程度の低いことに長嘆息することゝを禁じ得ない。我國に於ては、單に文藝が理解されてゐないばかりか、假令其の本領が多少理解されてゐても、之れを教育の上に立派に適用せんとする工風——並々ならぬ努力を要する斯やうな工風に至つては、殆ど全く考究されなければかりか、ほ



んの夢想さへもされてゐない。何等の工風も努力も重ねずして、最初から文藝排斥を主張する如きは、如何にしても文化國に有り得べからざる事ではないか。

私はこゝで細かに文藝利用の方法を研究すべき餘地を持たない。故にこゝでは、單に世間の誤解に對する一二重要な點を指摘することに留める。教育の根本に文藝を引入れるといふことをば、世間は小學や中學の初年級にまで、實質的に複雑な文藝を課することゝ考へてゐる。斯くの如きは勿論非常な誤解である。他の學科目が教育的に課されると同じ意味で、文藝も同じく教育的に利用されなければならぬ。殊に文藝の場合に於ては、それが特殊な學科目であるよりは、寧ろ他のすべての學科の根本に文藝的精神が宿つてゐることを必要とする。殊に小學校や中學の初に於ては、特殊の學科目としてよりも、主として教師の人格に文藝的な創造的な精神が宿つてゐることを、文藝教育の根本條件とする。初等教育に於てはこれに相當する程度の直覺力や創造力やが養はれるが必要であるが、教師の人格はすべての感化の根本であるから、教育者みづから文藝的であるといふことが、やがて文藝教育の根

本である。斯やうな見地から觀て、私は今日の師範教育に對して、深い々々不滿を感ぜざるを得ない。そこには何等の人間學も直覺學も創造學も無くして、たゞ無味乾燥な處世學や功利學やが有るのみである。斯やうに干からびたインスチチューションを本體として、そこから立派な文化の流れを導かうとする如きは、餘りに無暴な餘りに虫のよすぎた話ではないか。淵源先づ涸渇してゐるのであるから、其の末流が濕ふべき道理が無いではないか。

今日中學上級の國文なども、其の教科書なり教授法なりが餘りに非文藝的に傾いてゐる。學生はたゞ辭句の暗記に囚はれて、これによつて直覺や感情やを養ふ機會は與へられてゐない。西洋の中等以上の學校で、自由にホーマー、エスキラス、シエイクスピア、ゲーテ、シレル等が翫味し賞翫されることを思へば、我國中學程度の學校は、餘りに非文藝的に或は反文藝的にさへも傾き過ぎてゐる。西洋のクラシックの文藝なども、もつと積極的に學校に引入られるが宜い。『イリヤッド』や、『ファウスト』や、『イフィゲニー』や、『ウキルヘルム、テル』など、學生に取つて危



險なものかは、寧ろ絶好の教育資料ともいふべきではないか。

今日教育界の一部に勃興しつつある所謂自由畫や自由作文は、文藝教育の立場から觀て、最も熱心に歡迎さるべき傾向である。創造性を磨滅するやうな教育は、決して眞の教育とは言はれない。我國の教育は今日まで餘りに形式的に傾いてゐた。

最後に近ごろ問題と成つてゐる近代文藝の危険性といふことに就いて一言したい。教育者側の人は、動もすれば、文藝は甚しく青年を邪路に誘惑するやうに考へてゐるが、實はそれは一片の杞憂に過ぎない。文學中毒とか哲學中毒とか呼ばれるものは、實は直接本人みづから又は實社會から害毒を受けたもので、文學や哲學やは決して其の根本原因ではない。各種の誘惑や害毒やは直接に實社會から受ける場合が多い。若し青年や廣い社會やが、近代文藝によつて或は人生の暗黒面や、或は所謂進歩思想又は感情を會得し感收することが多く、それが所謂文藝の危険性であるとすれば、斯かる危険性は一國文化の進歩からは、寧ろ歡迎され庶希さるべきものではなからうか。勿論複雑な近代文藝のすべてを、直に最も若い靈魂に會得させようとするは、

甚しい非教育的な業であるが、廣く社會教育の要具としては、近代文藝は寧ろ除外すべからざる好個の資料ではないか。近代文藝を除外しての文化——斯やうなことが果たして眞面目に考へられるであらうか。私は今日は教育者が、もつと積極的に近代文藝をこなし、そこから廣く深く徹底した眞知識を得て、それを立派に被教育者の靈魂に植えつけることを望まざるを得ない。眞の文藝的精神を除外しての教育や文化やは無意味であつて、教育や文化やの根柢には、必ず文藝的精神が無くしてはならない。私は徒に文藝の形式を教育に引入れることを主張する者でなく、寧ろ眞の文藝的精神を教育の根本に注入せんことを望む者である。精神が主であつて、形式はどうでもよいのである。(大正一〇年五月)



大正十四年

一月

十一月廿五日

發行

印刷

定價二圓八十錢



著書

金子馬治

發行者

東京市神田區表神保町三番地  
株式會社東京堂  
代表者 大野孫平

印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
瀧澤一郎

發行所

東京市神田區表神保町三番地

株式會社東京堂書店

振替東京二七〇番



メレジュコーフスキイ著 昇曙夢譯

### ■ トルストイとドストエーフスキイ

(四六判五百五十頁 函入洋布 定價三圓 送料十八錢)

現代の世界的大批評家大思想家として名聲高きメレジュコーフスキイが畢生の努力を傾倒したものは本書である。近代ロシア文學の二大巨人の生活と藝術とを批判解剖して此書程深刻に達したものは未だ世界を通じて絶對にない。また著者の主觀的心理批評が、この書くらい最高の詩美を帯びて表はれたのも他に見ない所である。しかもその透徹した藝術批評の底に全人類の運命に對する豫言的暗示を以て東方精神と西歐精神の矛盾を解決し、來らんとする「第三の聖靈の王國」を教へてゐる。批評にして批評を超える本書こそ、正に精讀を薦めたる第一の書である。

ベルグソン著 廣瀬哲士譯

### ■ 笑の哲學

四六判洋布裝  
定價二圓  
送料十錢

本書は現代哲學界の最高權威たるアンリ・ベルグソンの滑稽と喜劇に就ての透徹した研究であり、即ち笑の哲學である。アリストオト以來あらゆる哲學者の難問題であつた「笑とは何ぞや」に敢て接近したベルグソンは、道化の笑、言葉の可笑味、シチュエーションの可笑味より更に高級なる性格喜劇の滑稽に至る迄悉くこれを氏獨得の哲學體系に網羅し、進んで笑と社會生活、藝術の本質と笑文學は如何なる關係あるものや等の諸問題を柔軟自在明確に解答を與へてゐる。譯文また明快、文學、藝術、哲學に志す人は勿論敢て萬人の必讀を薦める。



四高教授 文學士 高橋禎二譯述

### ■文學原論

文學の本質は抑も如何、美とは如何、悲壯、崇高、滑稽、ユーモア等の美的觀念とは如何、悟性、想像、詩的直観とは如何なるものなりや、本書は現マールブルヒ大學教授エルスタア博士の名著に基づいて文學の原理を或は心理學の上に置き、或は哲學、或は美學の質と、文藝批評の原理とに通ぜしめるであらう。

四六判四百頁上製  
定價二圓八十錢  
送料 十二錢

早稻田大學教授 森口多里著

### ■近代美術十一講

十九世紀迄の西洋美術を書いたものは澤山あつても、現代の意味深い諸運動や傾向を一括して記述したものは歐米にも見當らない、本書はラファエル前派、印象派、後期印象派、立體派、幾何學派、シュタイニズム、未來派、表現派、ダダイズムに至る諸運動の理論と意義及び各派の畫家と其作品につき明快に講述したるもの、苟くも現代の美術を鑑賞せんとする人々の必讀すべき名著である。

四六版口繪四十二枚  
定價 三圓  
送料 十八錢

本間久雄著

### ■婦人問題十講

婦人問題は單に婦人のみの問題でなく實に重大なる社會問題である。社會の改造は、この婦人問題の解決に俟つことが多い。本書は我國婦人問題の權威たる著者が婦人運動の由來意義より、性道德、結婚改造案、參政權運動、産兒調節に至る迄汎く歐米の學說を参照して其の方向と歸趨とを示したる唯一の名著である。

四六版四百卅頁  
定價二圓八十錢  
送料 十二錢

早稻田大學教授 中島半次郎著

### ■教育思潮大觀

本書は古く唐虞三代の教學、希臘羅馬の人文主義より、實科主義、宗教主義、理想主義、自然主義、機械主義、個人主義、社會主義、國家主義、國際主義等十章に分ちあらゆる東西古今の教育思潮を夫々其時代の哲學・宗教・科學・藝術等の文化運動に連關させて平明に解説論究し、以て將來の教育思潮の奈邊にあるかを暗示せる斯界空前の好著である。

四六版四百頁  
定價二圓八十錢  
送料 十二錢



文學博士 金子筑水 著

### ■現代哲學概論

四六判四百五十頁  
定價二圓八十錢  
送料十二錢

哲學の本領と範圍とは時代によつて變遷し推移し、現代に至つて甚だしく複雑多岐を極めてゐる。著者はこの錯綜せる現代哲學を或は横斷し、或は縱斷して全體の潮流を平易に明確に、且つ系統組織的に講述し、以て人生窮極の意義を明にせられてゐる。吾人の内的生活に最も交渉ある現代哲學の眞生命に觸れんとする人、文化の精髓としての哲學の潮流を概観せんとする人々の爲めに敢て本書を推薦する。

文學博士 金子筑水 著

### ■歐洲思想大觀

四六判四百頁上製  
定價二圓八十錢  
送料十二錢

眞に歐洲思想を大觀せんには現時流行の近代思想にのみ頭を悩ましてゐたのでは無駄である。宜しく本書の如く古くは希臘の源泉に汲み、中世のストア、エピクロースを訪ね、近くルネサンスを詳かにしてロマンチズムをも窺ひ、又現實主義自然主義の眞髓をも究めねばならぬ。此容易ならぬ思想の變遷を、博士の老熟せる手練を以て簡潔明快に説き、何人にも一讀其全般に通ぜしむる。



50 5
1



終